

中学校における「生徒の自己決定」
実践事例集 第2版

令和4年3月

はじめに

目まぐるしく変化していく社会の中で、多くの情報に取り巻かれながらも自分の意思で様々なことを判断、決断していく力は、生徒の今後の人生において必要とされている力であり、学校教育においても生徒に身につけさせなければならない資質・能力である。生徒自身の意思で判断、決断していく力の育成の一環として、生徒の主体性・意欲向上を目指した活動は学校教育に求められるものであり、学校教育の様々な場面において実践されなければならない。

生徒の主体性・意欲向上を目指すための方策として、生徒指導の3機能の「自己存在感を与えること」、「共感的な人間関係を育むこと」、「自己決定の場を与えること」が生徒指導提要(文部科学省2010)に挙げられている。とりわけその1つである「生徒の自己決定」がもたらす影響として、「児童・生徒が、ダイナミックな日常生活のそれぞれの場面で、どのような選択が適切であるか、自分で判断して実行し、また、それらについて責任をとるという経験を広く持つことの積み重ねを通じて、自己指導の力は育てられる」(坂本1991)、「様々な場や機会を利用して、児童生徒に自己決定を求めていくような指導を行うことが、自発性や自主性、自律性や主体性をはぐくむ」(文部科学省2010)ということからも、生徒の主体性・意欲向上に影響を与えるとされている。

以上のことを踏まえ、今回機会をいただいた岡山県政策課題研究派遣の一環として、生徒の主体性・意欲向上のために、「生徒の自己決定」をテーマとした教職実践研究を進めてきた。「生徒の自己決定」をテーマとした教育実践のねらい、内容、留意点や実践による生徒の変容を整理し、事例集として綴ったものが本資料である。本資料を作成することで、学校全体で「生徒の自己決定」に関する実践を推進するとともに、生徒の主体性・意欲向上により効果的な「生徒の自己決定」について模索する際の参考にしていきたいと考えている。昨年度に第1版の実践事例集を作成し、今年度は更なる実践を重ねることで事例数を大幅に増やし第2版となる実践事例集としている。

本資料をご一読いただいている皆様方には、本資料の事例における「生徒の自己決定」に関する実践の、効果的な場面、形式、教師の働きかけ、工夫点や留意点、生徒の変容等を基に、生徒の主体性・意欲向上を目指した実践にご活用いただきたい。

最後に、本資料の作成にあたって、ご指導いただいた香川大学教職大学院指導教員の先生方、実践を進め、事例をご提供頂いた岡山県津山市立津山西中学校の皆様方に深く感謝申し上げます。

令和4年3月

岡山県津山市立津山西中学校 教諭 福元 亮彦

(令和2年度 香川大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻 学校力開発コース)

目 次

I. 学習場面における実践

1. 授業づくりに関する実践

- (1) 生徒の主体性向上を目的とした振り返りシート(1年生社会科)…………… 1
- (2) 学習内容のまとめを生徒自身で行う実践(1年生社会科)…………… 3
- (3) 社会科の授業による主体性を育てる授業システム(1年生社会科)…………… 5
- (4) タブレット端末を活用して生徒が課題解決を目指す授業づくり(1年生数学科)…………… 7
- (5) 班長制を取り入れた保健体育の授業実践(1年生保健体育科)…………… 8
- (6) 自己選択により達成感を得る家庭科実習(1・3年生家庭科)…………… 9
- (7) 生徒が授業内容を「自分ごと」と捉える英語科の授業実践(1年生英語科)…………… 10
- (8) 生徒の想像力、表現力を伸長する英作文の授業実践(1年生英語科)…………… 12
- (9) 振り返りシートによる主体性の向上と基礎学力の定着を図る英語科の授業実践(1年生英語科) …… 14
- (10) 生徒主体の振り返り・まとめを活用した主体的で対話的な授業展開(2年生国語科)…………… 16
- (11) 生徒主体の授業を目指した「ミニティーチャー」実践(2年生数学科)…………… 19
- (12) タブレット端末を活用した主体的で探究的な授業づくり(3年生国語科)…………… 20
- (13) 生徒による説明を重視した実践(3年生理科)…………… 21
- (14) 生徒が教員役を担う授業実践(特別支援学級3年生英語科)…………… 22
- (15) 道徳の授業におけるOPPシートを活用した意見記入の実践(全校道徳科)…………… 24

2. 課題学習に関する実践

- (1) 自主練習ノートによる家庭学習の定着(1年生英語科)…………… 26
- (2) 自主学習ノートと振り返りシートによる実践(2年生社会科)…………… 28
- (3) 生徒が自ら内容を選び、取り組む家庭学習(2年生国語科)…………… 30
- (4) 自主参加型の質問教室と補充学習の活用による学習支援(5教科【国語・数学・英語・理科・社会】) …… 32
- (5) タブレット端末の活用による自己調整学習(5教科【国語・数学・英語・理科・社会】)…………… 33

3. テストに関する実践

- (1) 選択式小テストの実践(2年生理科)…………… 34
- (2) 生徒の主体的な学習を促進するための小テストの実践(3年生理科)…………… 35

4. 総合的な学習の時間に関する実践

- (1) タブレット端末を活用した職業調べの実践(1年生)…………… 37
- (2) 生徒の自己肯定感の向上を目指す探究活動(2年生)…………… 38
- (3) タブレット端末を活用した主体的な学びにつながる総合的な学習(3年生)…………… 39

Ⅱ. 特別活動における実践

1. 学級活動

- (1) 班長会を核とした学級経営(1年生)..... 4 0
- (2) 生徒を主体とした振り返りと目標設定の実践(1年生)..... 4 1
- (3) メッセージカードを活用した自己肯定感向上を目指した取り組み(1年生)..... 4 3
- (4) 生徒の自治能力を高める、生徒による授業態度評価の実践(1年生)..... 4 4
- (5) 生徒の自己評価と生徒間相互評価を生かした取り組み(2年生)..... 4 6
- (6) 1分間スピーチによる自己表現活動(3年生)..... 4 8

2. 生徒会活動

- (1) 生徒による生活目標の設定と自己評価を生かした委員会活動(1年生)..... 4 9
- (2) 学級代表委員会による学級課題の解決(1年生)..... 5 1
- (3) 学級代表委員会による目標設定および目標達成の実践(2年生)..... 5 2
- (4) 委員会活動と連携した規範意識の向上をねらった実践(2年生)..... 5 4
- (5) 学級代表委員会による学級の理想像の実現(3年生)..... 5 5
- (6) 生徒会による啓発動画作成(生徒会)..... 5 7

3. 学校行事

- (1) 生徒が主体となって企画運営した学年行事(1年生)..... 5 8
- (2) 生徒全員が企画・準備・運営に携わる学年行事(学園祭)の実施(3年生)..... 5 9
- (3) 3年生運動会実行委員会による学年種目の企画・運営(3年生)..... 6 1
- (4) 教員企画による生徒参加型行事(教員の0JTグループ活動による実践)..... 6 2
- (5) 「生徒の自己決定」による主体的な行事づくり(全校文化祭)..... 6 4

Ⅲ. 部活動における実践

- (1) 生徒のボトムアップによる部活動運営を目指した取組(女子テニス部)..... 6 5
- (2) 生徒の主体的活動を基盤とした部活動運営(野球部)..... 6 6

Ⅳ. その他の場面における実践

- (1) 生徒の読書意欲の向上を目指した図書館の活用(教員の0JTグループ活動による実践)..... 6 7
- (2) 生徒の発想力と表現力を向上させる作品募集の実践(教員の0JTグループ活動による実践)..... 6 8
- (3) 地域行事へ参加する教員チームの、生徒へのチーム名募集(教員の有志チームによる実践)..... 6 9

I. 1. (1) 生徒の主体性向上を目的とした振り返りシート(主体性伸ばしシート)

1 実践の場面

教科学習(1年生社会科)

2 実践のねらい

基本的内容の定着を図るとともに、生徒の主体性を向上させる

3 実践の内容

授業の毎時間、終了間際に本時の学習内容について、重要語句を生徒自身が選択し、それについて教科書やノート、プリントを頼りに生徒自身で調べ、内容をまとめる作業を行う。基本的に生徒自身の力でまとめを行い、最終的にまとめ終わったものは提出させるようにしている。また、授業内容のまとめと同時に、授業に対する自分自身の姿勢を、自己評価で振り返る項目も設けている。提出したものは、教員が点検をし、評価、返却する。この振り返りプリントの内容を学習評価にも反映している。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒自身が授業で学んだ重要語句を自由に選択し、自分で教科書やノート、配布されたプリントを基に、重要語句について調べ、その内容について「まとめ」を行う。また、重要語句については、複数回の記述を行うことで、重要語句の暗記、定着を目指す。提出したシートをファイルに綴じ、単元のまとめ時に行う「まとめシート」に役立てる。

② 教員の関わり

授業終了前に、シートを配布し、シート内容の記述に関しては生徒自身に任せ、教員はほぼ関与しない。シート記入がなかなか進まない生徒に対しては、声かけなどの助言を行ったり、授業で提示した資料を生徒に確認させることで、何を記述すればよいかヒントを与えるようなフォローを行う。

③ 実践の過程

実践の開始時には、シートに何を記述するのか、何を参考に記述するのかを詳細に説明した。最初に説明を行った後は、毎時間繰り返しこのシートへの記述を継続することで、習慣化し記述になれるようにする。

④ 活動の振り返りや評価

生徒が記述した振り返りシートは、回収後にA、B、Cで評価をし、返却するようにしている。授業内容を踏まえているか、自分の考えを記述できているかで評価をかえている。基本的には、授業をしっかりと聞いていればAの評価がもらえるようにしている。(授業内容を記述できていればAとなる)

⑤ 実践の準備

振り返りシート【資料I. 1. (1)】の準備

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

生徒自身に授業における重要語句について調べる、まとめる、記述させることで、何が難しいのか、何を覚えないといけないのかを自分自身で気づくことができている。そういった面を考えると、生徒の主体性が向上しているのではないかと思える。単元のまとめ時におこなう「まとめシート」への記述が増えるなど変化が見られた。本実践によって、生徒の主体性の向上と同時に、基礎学力の向上にもつながっていると考えられる。

I. 1. (1) 主体性伸ばシート

社会科 主体性伸ばシート

評価

今日のページ

A 今日の授業の中で自分が大事だと思った語句はどれか選んで書こう

※選んだ語句を4回書いて練習しよう!! 漢字書き間違い要チェック!!

語句	① 近郊	② 促成栽培	③ 輸送園芸
練習	近郊	促成栽培	輸送園芸
練習	近郊	促成栽培	輸送園芸
練習	近郊	促成栽培	輸送園芸

B 一問一答を作ろう (語句の説明・何した人・誰が行った政策を自分で調べる。)

語句①... 大都市の近くで新鮮なものをとくる。

語句②... 旬の時期を早める

語句③... 大都市からはなれていったものを高速で運ぶ

自己到達確認

今日、何ができたようになったのか	評価のレベル (自分で○をする) わからない ⇔ わかるものとわからないもの ⇔ わかる
1. 知識・技能	教科書の太文字や資料が何についてのものかわかる C B A
2. 思考・判断・表現力	出来事や変化について「なぜ」そのようなことが起こったのか、なぜそのような変化をしたのかがわかる。 C B A
3. 主体的に学ぶ姿勢	私語や立ち歩き、寝るなど授業妨害・不参加しなかったか・教えあいや発表・考の問題は積極的に行えたか C B A

I. 1. (2) 学習内容のまとめを生徒自身で行う実践

1 実践の場面 教科学習(1年生社会科における実践)
2 実践のねらい 生徒が自分の考えを、自ら表現する力を養う
3 実践の内容 授業の単元ごとに、学習したことを1枚のシート(「まとめシート」)に生徒自身がまとめる。単元内の各授業で毎時間小さなまとめ(主体性伸ばシート)を参考にこの単元のまとめを行う。単元のまとめに当たる課題を教員が設定し、各授業の学習を基に、生徒自身が自分の考え、意見をまとめ、記述するシートである。「まとめシート」を記述する時間を単元最終時期に確保している。基本的には、生徒個人での作業になり、集中的に取り組むことができる。記述内容については、正解はないが自分の考えをしっかりと書くことがポイントであり、そのことを生徒自身もしっかりと理解したうえでこの実践を行っている。内容の良いものは、学年全体で掲示することで、生徒の自己肯定感につなげ、他の生徒の参考とすることができる。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 6時間に1回程の頻度で、この「まとめシート」を記述する時間がある。この「まとめシート」を記述する時間までに、毎時間の授業において、小さなまとめ(主体性伸ばシート)を記述しており、「小さなまとめ」の積み重ねを今回の「大きなまとめ」につなげるシステムになっている。 ② 教員の関わり 「単元のまとめ」のために課題を与える程度の関わりにとどめている。まとめを書いている最中には、生徒が自分の考えを記述しているものに対して、意図的に教員から「なぜそう思うのか」などと質問することで、生徒から自分自身の考えを引き出すようにしている。まとめの記述が進みづらい生徒に対しては、毎時間の「小さなまとめ」を写してもよいなど助言している。また、記述内容の良いものは、廊下に掲示するなどし、生徒の自己肯定感の向上を図っている。 ③ 実践の過程 単元のまとめまでの毎時間の授業での「小さいまとめ」を継続的に行うことで、単元の最終的な「大きなまとめ」につながるため、日頃の授業でのまとめを大切にしている。それによって、「まとめをする」ということが習慣化されている。「小さなまとめ」が第一段階で、まずはその段階で自分の考え、意見を記述できるようにしている。 ④ 活動の振り返りや評価 学習したことをまとめの記述に用いながら自分の考えを書くことに評価の重きを置くようにしている。記述内容には正解がない分、自分の意見を記述できていたら高評価にすることで、記述に対する意欲の向上をねらっている。また、記述内容の良いものを廊下に掲示することで生徒の自己肯定感の向上をねらっている。 ⑤ 実践の準備 「まとめシート」【資料I. 1. (2)】の準備、シートをまとめる際の課題の設定、掲示の準備
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) この実践を継続することで、生徒が次第に自分の考えを持つようになり、文章で記述するという表現力が身についてきていると感じる。テストでの記述においても、自分なりに記述しようとする姿勢が見られる。また、掲示された自分のシートを見つけ、喜んでいる姿も見られた。

I. 1. (2) まとめシート

オセアニア州 第2章 世界の諸地域

1年(

全体を貫く問い 地球最後のフロンティア(開拓地)と呼ばれるアフリカ州の未来をどのようにして作っていけばよいのか、それぞれの州で学習した法則をもとに、アフリカ州の今を踏まえた上で、具体的な提案を入れた自分の意見を作ることができる。

単元の課題 なぜ、オセアニア州はアジア州とのつながりを深めているのか、学習したことをもとに自分の考えを書くことができる

※各時間の振り返りや考えの変化を記入する。

ねらい	1. オセアニア州は日本と比べてどのような特徴を持つ州なのだろうか	2. なぜオーストラリアは先進国なのに人口が増え続けているのか	3. なぜオーストラリアの貿易相手に大きな変化があったのだろうか
まとめ	オセアニア州はコソリアアホリシなどの先住民がおり日本と同じように火山や地震が多い島国と地震は少ない日本とは季節や気候の違うオーストラリア大陸に接している	かつてイギリスの植民地であったことからヨーロッパ系の移民が多く、一時は白豪主義などの政策をとっていたが、労働力不足により多文化主義へと変え、距離の近いアジアからの移民を受け入れたから。	イギリスの植民地であったため羊毛の輸送などイギリスとの関係が深かったがイギリスのEC加盟後は豊富な資源地はなし距離の近い、経済発展しているアジアとの関係をメカにするようになったから。
ねらい			
まとめ			

振り返り

なぜ、オセアニア州はアジア州とのつながりを深めているのか、学習したことをもとに自分の考えを書くことができる

オセアニア州は経済発展をするためにアジア州とのつながりを深めています。理由は2つあります。1つ目は多文化主義が強いからです。一時期は白豪主義で白人以外には入れなかったけれど、第二次世界大戦で人口が減少したから、アジア系の移民の受け入れを再開するとたまたまの人口不足を目的で訪ねました。それにより、多文化主義が定着し経済が手をつけているからです。2つ目は貿易が簡単に行えるからです。アジア州はイギリスよりも距離が近いので輸送費も軽減です。イギリスはイギリスと気候帯が違うため羊毛を輸出できないからもう一つの豊富な金庫資源とすることによって日本とも貿易をしています。そしてAPECに加盟し、アジア州の中で盛んに貿易を行い、たまたまの移民がいて、経済発展をさせることができるから、アジア州との関係が深くなっています。

A

I. 1. (3) 社会科の授業による主体性を育てる授業システム

1 実践の場面 教科学習(1年生社会科における実践)
2 実践のねらい コミュニケーション能力を育成し、表現力を向上させる
3 実践の内容 簡潔に言うと、ジグソー型の授業形態である。3～4人の小グループを用いて、生徒自身が自分たちで教員から与えられた課題(最終的には単元のまとめにつながる本時の課題を考えるための、細分化された小課題)の担当を割り振り、それぞれが担当する課題について、資料を基に考える。課題自体は、一問一答ではなく、資料を基に説明したり、資料をまとめる内容である。それぞれの課題に対して個人がまとめた内容を、小グループ内で発表(伝える)することで、小グループ内で、ワークシートがすべて埋まるようになっている。その埋まったワークシートを基に、本時の大きな課題について考え、グループ内で発表し合い、班内での優秀な回答を決定する。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 授業内で与えられた課題を小グループ内で生徒が割り振る。担当した課題について、与えられた資料を基に個人作業でまとめる。まとめた内容をグループ内で他者に説明し、その説明を基に、各自がワークシートを仕上げていく。最終的には、仕上げたワークシートを基にグループ内で本時の課題について考え、発表し合う。 ② 教員の関わり ワークシートを通じて本時の課題につながる課題を与える。課題について個人作業で考える際に、机間指導にてフォローを行う。ただし、教え込むスタンスではなく、生徒に対して質問を上手に行うことで、生徒自身の言葉を引き出すように心がけている。 ③ 実践の過程 授業の展開の仕方、課題のまとめ方などを説明することからスタートし、資料の読み取り方や読み取る手順についてプレゼンなどを活用し詳細に説明する。実践の序盤から個別作業からグループ内での発表までスムーズにできていたため、段階的な手順は踏んでいないが、日頃から演習問題の丸付けなど簡単な作業を小グループで行うことで、説明する活動につなげるようにした。 ④ 活動の振り返りや評価 グループ内で、大きな課題に対する最終的な回答(考えをまとめたもの)の優秀なものを決めることで、生徒の自己肯定感の向上につなげるようにしている。また、より優秀な回答についてはグループ内だけではなく、授業内において学級全体で披露する。 ⑤ 実践の準備 ワークシート【資料I. 1. (3)－1】、課題解決のために読み取る資料【資料I. 1. (3)－2】、個人作業やグループ活動の時間マネジメント
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) 生徒一人一人が小グループ内で課題を担当しているため(自分が責任をもって課題に取り組まないとグループに迷惑をかける)、責任をもって意欲的に活動に参加している。資料の読み取りや資料を関連付ける力が身についたと感じる。また、自分の言葉で課題の回答を説明することで、生徒の自己肯定感につながっていると感じる。自分の考えを自分の言葉で表現する力が身についている。

I. 1. (3)－1 ワークシート

ねらい：なぜ沿岸部のリオデジャネイロは首都ではなくなってしまったのだろうか

PII 4~115

「南アメリカではどのような方法で、こういったものを中心に輸出している、どのような特徴をもつどのような経済のため、どのような困ったことがあるのか。」

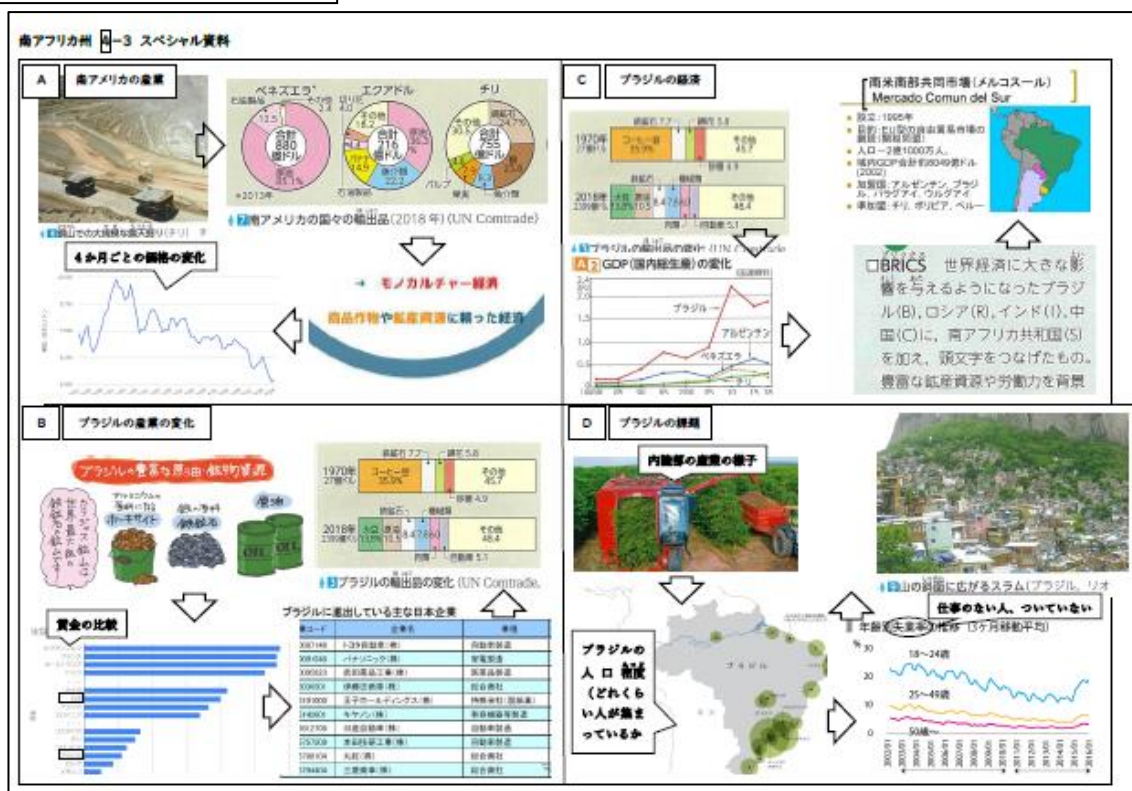
「ブラジルにはどのような特徴があり、またどのような特徴があるため、
どのような動きが起こった結果、どのように変化したのかな。」

「ブラジルはどのように変化したことで、どのような変化をし、何と呼ばれるようになり、現在ではどのようなことをしているのかな。」

「内陸部でどのようにしてしまったので、どのような変化が起こったものの、どのような現状で、どのようにしているのかな。」

--

I. 1. (3) - 2 読み取り資料



I. 1. (4) タブレット端末を活用して生徒が課題解決を目指す授業づくり

1 実践の場面

教科指導(1年生数学科における実践)

2 実践のねらい

タブレット端末を活用して、学習課題について生徒が自ら調べ、解決しようとする力を養う

3 実践の内容

数学の授業内において、与えられた学習課題について、個人で考えるとともに、周囲と考える(協同学習)ことから始める。最終的に、一人一人に割り当てられているタブレット端末を活用し、インターネットの検索機能を使い、課題の解決法やそのヒント等を、生徒自ら調べ、課題に取り組む。ただ答えを見つけるのではなく、解決方法を検索することで、課題の解き方を考えさせるようにしている。また、自分に合った内容や解き方を見出す自己調整学習にもつなげる。自分が理解できた、わかりやすかった解決法を生徒が自ら選び、生徒同士で紹介し合ったり、教え合うことも行い、学習に深みを持たせる。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

授業で与えられた課題を個人で考え、その後に周囲とともに考える(協同学習)。そこでわからなかった課題や理解が難しかったものを、タブレット端末の検索エンジンを使って生徒自身で調べる。その中で、自分に合った解法や問題を解くヒントを見つけ、再度、課題解決を目指す。また、授業の最後には、生徒間でわかりやすかった解法や考え方を紹介し合う。

② 教員の関わり

教員は、課題を与えるだけで、生徒に課題の解き方等を直接教えることやヒントを与えることはしない。ただし、タブレット端末で検索する際のキーワード等は、助言することもある。また、与える課題についても、難易度を若干高めに設定することで検索することに価値を見出すようにしている。

③ 実践の過程

いきなり検索するのではなく、まずは個人で考えること、協同学習で教え合うことを行う。また当初は「検索するキーワード」を与えて検索するようにしていた。しかし、課題解決法の検索を定期的に取り入れることで、どういった検索をすれば見つけやすいかを生徒自身でつかめるようにした。

④ 活動の振り返りや評価

「答え」を見つけだすのではなく、「解決法」を見つけることに重きをおく。また、検索した解決法により出した答えも、個人の力で考えて導き出した答えとして評価するようにしている。

⑤ 実践の準備

授業での課題(難易度を高めに設定)、タブレット端末(一人一人に割り当てられたもの)

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

現代のように、インターネットが普及しているので、学習においても有効に活用すればよいと思う。初めは、教員側に抵抗感があったが、生徒が解法を自分で調べて解くという過程を踏むので、最終的に生徒の考えて解く力につながっている。また、家庭学習においても、自分でできる手順であるため、家庭学習の定着にもつながっている。

I. 1. (5) 班長制を取り入れた保健体育の授業実践

1 実践の場面

教科学習(1年生保健体育科における実践)

2 実践のねらい

集団の先頭に立つ役割を経験することで生徒のリーダー性を育成する

3 実践の内容

体育の授業において、扱う競技(運動)ごとに班やグループを構成して授業を行っている。班やグループの中で班長を決めており、授業序盤の準備体操や競技や種目の練習は班長を中心に生徒の運営により行っている。班長の選出は立候補制を基本としているが、グループ数分の班長の人数が出ない場合は、グループ内での話し合いなどにより決定する。班長の役割としては、授業内でのグループの活動の運営の中心となること、生徒全員が記入する「振り返りシート」の配布、授業終了時の回収である。また、班長はグループ内のメンバーを評価する「活動評価表」(生徒間による相互評価)を記入する役割を担っている。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

体育の授業用に編成されたグループ(グループ編成は競技ごとに教員が決める)の中から、生徒の意思のもと班長を選出する。その班長は、授業内の準備運動や競技の練習や運動の内容をグループで決める話し合いの中心となり、グループの活動の運営を行う。また、授業後の振り返りシートの回収や活動評価表の記入などの役割もある。

② 教員の関わり

運動や練習で外せないこと以外に、グループ内での活動内容に関することは生徒に任せている。班長を選出する際にも生徒の意思、立候補の形にすることで多くの生徒に班長を経験させるようにする。

③ 実践の過程

実践の最初から班長にすべて任せるのではなく、グループ内での話し合いの進行法などが書かれたシートを模範に生徒は班長の役割を担う。授業を重ねていくにつれて、徐々に話し合いなどの活動方法は班長の意思に任せるようにした。やり方を覚え、要領を掴むことで、生徒自身により話し合いや競技や運動の練習などを進めるようにした。段階的に生徒に委ねていくことで生徒主体の活動としていく。

④ 活動の振り返りや評価

教員が授業の所々において、また授業のまとめ時に、班長の良い行動や他生徒への模範となることを全体で取り上げることで、班長の役割を担った生徒の自己肯定感を向上させるとともに、班長の役割を担うことへの意欲の向上につなげる。

⑤ 実践の準備

生徒人数分の振り返りシート、グループ数分の活動評価表

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

この実践により、生徒の主体性が高まると同時に、班長の存在により授業がスムーズに進行する場面が増えた。また、生徒から班長への立候補の数も増えており、集団内のリーダーの育成にもつながっている。活動中の班長の発言や動きを見ていると、集団の先頭に立つ難しさや班長としての責任を感じている様子が伺え、生徒にとって良い経験の場になっている。

I. 1. (6) 自己選択により達成感を得る家庭科実習

1 実践の場面 教科学習(家庭科における実践)
2 実践のねらい 自己選択を取り入れた実践的・体験的な学習活動を通じて達成感を得る
3 実践の内容 家庭科の実習において、生徒が意欲的に活動に取り組める工夫を行っている。実践的、体験的な学習活動を通じて達成感を得ることを目指した。1年生の「裁縫」の単元の授業において、決められたものを決められた手順で作製するのではなく、作製するものの色や形、柄など、生徒が自由に選択できる場面を意図的に設ける。また、3年生の保育の単元での「絵本作り」の授業においては、タブレット端末を活用しながら、生徒の自由な発想により作製を進めた。いずれの作業、活動も生徒同士の協同性、主体性を重視した。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 家庭科の実習において、生徒自ら選択しながら実習を進める。1年生の裁縫の単元では、色や形、生地、柄などを生徒が自由に選び作製していく。作成の際には班で作業を進めるため、生徒同士で手助けをしながら活動する。3年生の保育の単元では、絵本作りを一人一冊行う。内容は生徒が自由に決めることができ、タブレット端末を活用しながら自由に作製を進める。 ② 教員の関わり 教員は作業の手順についての説明は行うが、実際の作業は生徒自身に任せている。上手に作業ができていない生徒には、多少の手助けを行うこともあるが、上手な生徒や作業の速い生徒に声をかけ、生徒同士で手助けをするよう促している。 ③ 実践の過程 実習では教員が手順や安全面についての説明を行った後、生徒が自らの手で作業していく。実習の序盤では個人での作業を中心としていたが、生徒の実態に応じて、途中から班などによるグループでの実習活動とした。 ④ 活動の振り返りや評価 実習活動で作ったものは成績に関わるものなので優劣の評価を行うが、活動に対する姿勢(上手でなくても意欲的に取り組むなど)をしっかりと評価する。他者を手助けすることや協力すること、意欲的に取り組むなどの姿勢は授業の最後に取り上げ、生徒の自己肯定感の向上を目指している。 ⑤ 実践の準備 生徒が自ら選ぶことができる教材(材料)、生徒が協同的に実習活動を行えるようなグループ編成が必要である。
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) 生徒は意欲的に集中して取り組み、達成感を感じている様子であった。作製の際に、生徒が自分で決め、自分の思うように進めることができたことが生徒の意欲の向上につながった。後の学習単位においても、この実践の効果が持続したことで、生徒が意欲的に実習に取り組んでいた。

I. 1. (7) 生徒が授業内容を「自分ごと」と捉える英語科の授業実践

1 実践の場面

教科学習(1年生英語科における実践)

2 実践のねらい

生徒が知識や技能を身に付けるだけでなく、主体的、意欲的に学習に向かう姿勢を養う

3 実践の内容

英語科の授業において、ただ単に知識の定着、技能の向上だけを目指すのではなく、知識や技能を活用して様々なことを表現する活動を授業内に積極的に取り入れている。英語での表現活動により生徒が意欲的に学習に向かうことをねらいとしている。単語を覚える、文法を覚えるだけでなく、生徒が自分に関することを英語で表現する活動として、「クリスマスカード(教員へ向けて、友だちへ向けて)の作成」や学校から自分の家への「道案内」を題材にして、学習に主体性を持たせた。英単語の暗記や文法の活用による英文作成、英文の読解など知識や技能の習得に重きが置かれた学習ではなく、この実践においては生徒が学習を「自分ごと」と捉え、意欲的に取り組めるように工夫をし、自分に関することを表現する活動を含んだ学習が中心となっている。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

英語の学習において、既習事項の英単語や文法を活用して、「クリスマスカード」を作成する。作成する相手は授業担当者である教員と生徒が自由に決めた友だちとしている。メッセージカードを書く相手や内容は自由であるため、生徒の自由な発想を生かした活動となっている。また同様の活動として、既習事項を活用して「道案内」の英作文を行う。教科書などの既存のものを題材として扱うのではなく、自分自身の家への道案内としているので、生徒一人一人の内容が異なり、独自性のある活動になっている。

② 教員の関わり

「クリスマスカードの作成」、「道案内」とともに、内容に関しては生徒の自由な発想に任せている。作成にあたっては、生徒同士で相談しながらでもOKとしているので、英作文を苦手としている生徒へのフォローや英文の例示以外の部分では、基本的に生徒の主体的活動としている。

③ 実践の過程

ある程度の英語に関する基本的知識や技能はある程度必要となるので、日頃の授業や宿題などで基本的なことを身に付けさせる必要がある。また、日頃の授業から生徒同士の交流を頻繁に行うことで生徒同士の協同性も養うようにしている。本実践の活動においては、英文の例示から始めることで、苦手としている生徒が取りかかりやすくしている。

④ 活動の振り返りや評価

クリスマスカードは生徒同士で交換することになっており、生徒同士の相互評価にもなっている。「クリスマスカード作成」も「道案内」も内容は生徒自身に任せているため、基本的には肯定的に捉えるようにしている。また、内容的によいものは全体場で取り上げ、掲示することで他者への模範となるようにしている。

⑤ 実践の準備

クリスマスカード【資料I. 1. (7) - 1】の準備、「道案内」【資料I. 1. (7) - 2】のワークシート、日頃の授業から交流的な活動を積極的に取り入れ、協同性をもたせた授業づくりを意識している。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

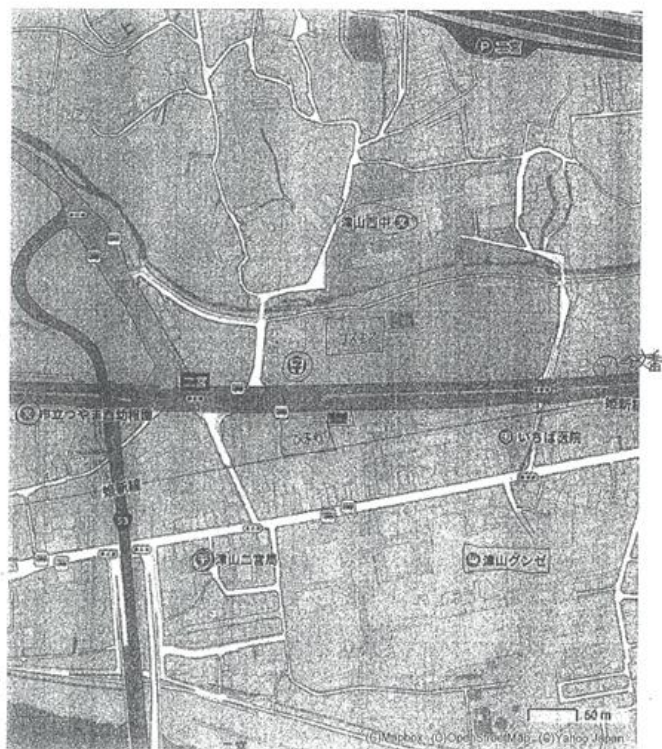
生徒にとって身近な内容を教材として扱うことで、生徒が自分で必要な語句を考え、表現しようとしている姿が見られた。自分の身の周りの人へのメッセージや身近な道案内など、取りかかりやすい教材とすることで、生徒同士による協同学習をすすめることができた面もあり、生徒にとって主体的な学習になった。

I. 1. (7) - 1 クリスマスカード



I. 1. (7) - 2 「道案内」ワークシート

YAHOO! 地図 岡山県津山市二宮周辺の地図



津山西中から (コスモス) への道順を英語にすると?

- Go along this street.
- Turn left.
- Go straight.
- You can see it on your left.

津山西中から (本番) への道順を英語にすると?

- Go along this street.
- Turn left at the first traffic light.
- Go straight.
- You can see it on your left.

(津山グンゼ) が 津山西中への道順を英語にすると?

- Go along this street.
- You can see it on your front.

I. 1. (8) 生徒の想像力、表現力を伸長する英作文の授業実践

1 実践の場面

教科学習(1年生英語科における実践)

2 実践のねらい

英作文の活動を通じて、生徒の想像力や表現力を伸長する

3 実践の内容

英語の授業における英作文学習の一環として、ポストカードを作成する学習活動や写真を見てコメントを考える、写真の中の登場人物の心情をイメージし表現する学習活動である。「ポストカードの作成」では、生徒は自由に旅行先を決め、設定した旅先の旅行を想定する。旅先での出来事や旅行の行程、内容などを送る相手(生徒が自由に決める)に向けたメッセージを英作文で表現する。架空の旅行となっているので、生徒の自由な発想を表現できる活動となっている。また、「写真を見てコメントや登場人物の心情を考える活動」においては、その授業における新たな学習内容(文法や英作文)を用いて、生徒の自由な発想や表現をする学習活動になっている。両学習活動とも出来栄のいいものやユニークなものは掲示などにより全体に紹介する。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

英語の授業において、英作文の学習活動として、ポストカードの作成を行う。自分で自由に旅行先を決めることから始めるが、旅行先は行きたい場所で自由であり、架空の旅行となってもよいものである。その旅行に関することや旅行先のことなどを自由に英文で表現し、友だちや家族など自由に決めた相手に向けてメッセージとして送ることを想像しながら表現する。また同様の学習活動として、教員が準備した写真に関して、それに登場する人物や動物などの心情について自由に想像し、新たに学習した文法を活用して自由に表現する活動もある。

② 教員の関わり

想像する内容や英作文の内容は生徒の自由な発想に任せており、教員は英語を苦手としている生徒へのフォローや英文の例示などにとどめた関わりとしている。また、生徒同士の協同を促すような声掛けを意識的に行っている。

③ 実践の過程

いきなり英作文に取りかかるのではなく、まずは日本語を用いて自分で表現したい内容をまとめることからスタートする。生徒の自由な発想や表現に任せているが、まずは旅行先をどこにするか考えるなど、生徒にとってイメージしやすいことから想像させるようにしている。

④ 活動の振り返りや評価

英作文による表現ができたかどうかで、その授業で学習した文法や英単語の定着の様子を評価することができる。英作文の内容については生徒の自由としているので、肯定的に評価するようにしている。また、ユニークなものや内容が充実しているものを全体で披露し、掲示することで、生徒の自己肯定感の向上や他者への手本としている。

⑤ 実践の準備

それぞれの学習活動のワークシート【資料 I. 1. (8)】の準備、表現する活動の継続的実践

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

自由な発想をもとにメッセージをつくるので、生徒は楽しそうに取り組んでいた。今回の実践では、教員から細かな指示をする必要がないほど、生徒がすすんで様々な想像をしている様子がうかがえた。今回の実践に限らず、授業内では難しい文法表現を要求しないことで、生徒にとって取り組みやすい学習になると考えている。知識や技能も必要であるが、生徒が自分の思いをしっかりと持つことや表現することを大切にしたい実践を今後も継続していきたい。

I. 1. (8) ワークシート

STEP 2

自分が行ったことのある場所、または行ってみたい場所に今いるという設定で、親しい人に絵はがきを書きましょう。はじめに、書く内容をメモしましょう。

MEMO	
導入 (場所)	
内容 (したこと、感想)	
まとめ (結び)	

STEP 3

STEP 2のメモをもとに絵はがきを書きましょう。

POSTCARD

February 16, 2022

Dear Mother,

How are you? I am in Kagawa.

Now I am in the gym.

I play volley ball.

I enjoy volley ball.

I hope to hear from you.

Take care.

Love,

I. 1. (8) ワークシート



This dog looks sad.

I don't like broccoli.

I don't want to eat broccoli forever.

I want to eat meat.

I. 1. (9) 振り返りシートによる主体性の向上と基礎学力の定着を図る英語科の授業実践

1 実践の場面

教科学習(1年生英語科における実践)

2 実践のねらい

学習内容を自分の言葉(英語)でまとめ、振り返りを行うことで、生徒の主体性を向上させるとともに基礎学力の定着を図る

3 実践の内容

英語の授業において、単元ごとに振り返りシートを活用し、学習したことをまとめ、生徒が自分自身の変容についてつかみ、自己評価する実践である。各単元での学習について、まずは事前の自分の知識や技能の様子を生徒自身が評価、記入する。毎授業ごとに、その授業内の学習について生徒自身の言葉でまとめを行い、授業に対する姿勢や理解度などについても自己評価する。毎授業の振り返りを一枚のシートに蓄積し、単元の最後にそれらを踏まえたうえでの単元のまとめと振り返りを行うことで、事後の自己評価も含め、単元前と単元後の自身の変容をつかむ。いずれの記入内容も日本語で記入することもOKとしているが、英語で記入すると教員からの評価を高くするようにしている。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

一人一枚の振り返りシートが各単元に準備され、単元の学習前に事前の自分の様子について自己評価を行う。毎授業でその授業内で学習したことを生徒自身が自分の言葉(日本語でも英語でもOK)でまとめを行い、授業に対しての取り組み姿勢や授業の学習内容についての理解度を自己評価する。このまとめと振り返りを繰り返し、単元の最後に単元内の学習のまとめを行い、事前と事後の自身の変容をつかむ。

② 教員の関わり

基本的には、生徒自身の言葉でまとめと振り返りを行うので、教員は記入内容に関して深くは関与しない。記入も日本語、英語のどちらでもOKとしているので、それぞれの生徒の実態に合わせて、助言などを行うぐらいである。授業内でどのような例文を学んだか、どのような文法を学習したかなどの質問をしながら、生徒の言葉を引き出すようにしている。

③ 実践の過程

実践の序盤では、書き方などを細かく説明し、授業の振り返りを記入する時間も多めに確保し、丁寧に取り組ませていたが、記入する習慣が身につくとなると自力で、短時間で記入できるようになってくるので、徐々に時間を短縮するようにした。また、生徒の記入した振り返りシートを記入例として掲示、参考とすることで記入に対して抵抗感がなくなるよう工夫した。

④ 活動の振り返りや評価

このシートの活用自体が生徒の自己評価となっている。生徒の言葉で自由に記入しているので、授業の内容を踏まえており、ポイントを押さえたまとめであれば、高評価を与えている。また、日本語での記入もOKとしているが、英語で記入しているものに関してはより高く評価している。記入例として他者への模範となるものを掲示することで、自己肯定感の向上にもつなげる。

⑤ 実践の準備

一人一枚の振り返りシート【資料I. 1. (9)】の準備、よい記入内容のものを廊下に掲示する準備、自己評価する時間がある程度確保できる授業展開を毎時間考えておく。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

この振り返りシートを続けることで、次第に英語でまとめを行おうとする生徒が増えてきた。生徒が自分で判断し、自分なりの挑戦をしようとしている意欲が見られた。生徒自身での振り返りを継続していくことで、自分が新たにできるようになったことなど変容に気づくことができている。このシートの書き方に慣れるまでに一定の時間がかかったが、継続することが大切である。

I. 1. (9) 振り返りシート

Dictation and Reflection Sheet

Unit 8

A Surprise Party

Class _

Can-do Check Sheet

この単元でできるようになったこと 日本語で、英語ならさらによし。

聞くこと	今していることを聞き取ることができる。	Before 1 2 ③ 4 5 After 1 2 3 ④ 5	I can rithning "ing."
読むこと	今していることを読み取ることができる。	Before 1 2 ③ 4 5 After 1 2 3 ④ 5	I can reading "What is he doing?"
話すこと(やりとり)	誕生日や誕生日にほしいものをたずねたり、答えたりしてやり取りできる。	Before 1 2 ③ 4 5 After 1 2 ③ 4 5	be~ing を話せるようになった。
話すこと(発表)	自分やほかの人、絵の中の人などが今していることを話すことができる。	Before 1 2 ③ 4 5 After 1 2 ③ 4 5	読み取って話せるようになった。
書くこと	自分やほかの人、絵の中の人などが今していることを書くことができる。	Before 1 2 ③ 4 5 After 1 2 ③ 4 5	I can writing "running".

Date	Dictation
Date (ex.) December third	Dictation ex.) I am studying.
Day (ex.) Friday	Today's Goal I am running.
今日の授業は星いくつ? ☆☆☆☆	Reflection 「~している」は、be動詞と動詞のingでいける。
☆☆☆☆	Self writing I am eating lunch.
Date	Dictation
December 6th	I am swimming
Day	Today's Goal
Monday	Surprise Party!
	Reflection
今日の授業は星いくつ? ☆☆☆☆	Self writing I am singing.
Date	Dictation
December 7th	They are running now.
Day	Today's Goal
Tuesday	I am studying English!
	Reflection 動詞は「た」から、be動詞と一般動詞とが「ing」になることを知った。
今日の授業は星いくつ? ☆☆☆☆	Self writing I am swimming now.
Date	Dictation
December 8th	What are you doing?
Day	Today's Goal
Wednesday	What are they doing?
	Reflection ingとbe動詞のセットになっていた。
今日の授業は星いくつ? ☆☆☆☆	Self writing What is he doing?
Date	Dictation
December 9th	What are they doing now?
Day	Today's Goal
Thursday	What is Shinjo doing?
	Reflection
今日の授業は星いくつ? ☆☆☆☆	Self writing They are playing game.

I. 1. (10) 生徒主体の振り返り・まとめを活用した主体的で対話的な授業展開

1 実践の場面
教科学習(2年生国語科における実践)
2 実践のねらい
主体的で対話的な深い学びの実現による、基礎学力の定着と学習意欲の向上
3 実践の内容
毎時間の授業の終盤で、「振り返りシート」を記入させ、毎時間に回収して内容を点検している。次時の授業の導入で「振り返りシート」の内容を何人かに発表させ、それを基に単元の「まとめ」と「復習」を生徒自身で行う材料として活用している。毎時間の「振り返りシート」の発表を聞いて、その内容をメモする。そのメモを毎時間、蓄積することで、単元の最終時間に活用することができ、生徒自ら単元の「まとめシート」を作成する。また、「まとめシート」を作成する際には、「シンキングツール」(曼荼羅、ピラミッド、フィッシュボーンなど)を基に単元ごとに使い分けるようにする。
4 実践の留意点・工夫点
① 生徒の活動
毎時間、生徒が自分の振り返りを記入し、次の授業のときに、内容のよいものを教員が指名し、発表する。その発表を聞いて、他の生徒は、メモをとる。それを毎時間繰り返し、メモを蓄積する。蓄積したメモを頼りに、単元の最後に「まとめシート」を生徒自身で作成する。また、そのときに「シンキングツール」を参考にしながら、作成していく。
② 教員の関わり
単元の「まとめシート」を作成するときなどは、まとめる形は「シンキングツール」を参考にするとアドバイスするだけである。生徒同士で教え合う、参考にし合うことをOK(他の生徒の記述を写すこともOK)とすることで、生徒の力に任せている。また、教員がよい出来の「まとめシート」を参考にできるように傑作集ファイルを作成し、共通スペース(学年の廊下)に設置して自由に閲覧できるように工夫している。
③ 実践の過程
今回の実践は、4月当初の授業始め時期からスタートさせた。「振り返りシート」も「まとめシート」も説明を細かくしすぎると、生徒の発想を型にはめてしまうと考え、序盤から「とりあえず取りかかってみよう」というスタンスで始めた。毎時間の積み重ねを大切に、継続することで、段階的に内容の良いシートが仕上がっている。
④ 活動の振り返りや評価
自分の学習前の学習事項に対する認識と学習後の認識を記入することで、生徒自身が自分自身の考え方の変容が見える(わかる)ようにしている。そのため、自分自身でどのように考えが変わったかなど、自己内評価を行うことができる。また、教員が内容の良いものをファイリング(傑作集ファイル)し、他の生徒も閲覧できるようにし、自己肯定感の向上もねらっている。
⑤ 実践の準備
振り返りシート【資料I. 1. (10)-1】、まとめシート【資料I. 1. (10)-2】、傑作集ファイル
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)
生徒が主体的に取り組んでいる姿が見られる。多くの生徒が、この実践当初から意欲的に取り組んでいた。振り返りシートを宿題としたこともあるが、生徒は意欲的に取り組んでいた。学力の思わしくない生徒たちも、普段の授業の学習が理解できていなくても、単元最後のまとめの時間は、他の生徒のシートを参考にしてもよいし、写してもよいとしているため、一生懸命に取り組んでいた。

津山西中学校 2年生国語科 振り返りシート①

「動物園でできること」 振り返りシート

2年

各物はプロフィールで、漢字を覚えて丁寧に書きましょう。

●単元の目標

- ・読書を生活に役立て、思いや考えを伝えあおうとしよう。 主体的に学習に取り組む態度
- ・文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えよう。 思考・判断・表現
- ・文章の内容と自分の知識や経験を結び付け、考えを広げたり深めたりしよう。 思考・判断・表現
- ・意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解しよう。 知識・理解

●教科書・副教材のページ

- ・教科書 P182～192 ・国語の学習 P108～113

●漢字テストの範囲

- ・単元別 漢字マスター P56～59 (25・26)

●単元の計画

- 1時間目 筆者、明読CD、構成と要旨をとらえる
- 2時間目 内容理解
- 3時間目 主張と例示の関係に注意して主張をとらえる

●単元を学ぶ意義(文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えることを学ぶ意義)

結論と事実や意見の関係が理解できる。

●1時間の目標と振り返り

1時間目 2月10日(木) 5校時

目標	自己評価 (A)・B・C
本文CDを聞き、文章の構成をとらえて要約しよう。	「学びの温度計」と「Gitter」
学んだこと (授業で学んだことや 自分で調べたことなど 100字程度)	動物園は動物たちが、安全に暮らしているだけでなく、その動物の魅力を届けることも重要。そのためには展示や紹介も工夫して、動物本来の野生の一面を伝え、人間が動物への理解を深めていくことが必要。
感想 疑問点	動物園の奥深さから分かったような気がしました。

2時間目 2月11日(金) 5校時

目標	自己評価 (A)・B・C
例示の内容を整理し、文章内容を理解しよう。	「学びの温度計」と「Gitter」
学んだこと (授業で学んだことや 自分で調べたことなど 100字程度)	筆者は、動物園の野生の姿を見ることが大切だと思おう。例えはオランウータンやパンダの生活を見てもいい。その姿を見て楽しむことが大切だ。
感想 疑問点	動物園の仕事は、人種を超えての仕事だと思いました。

3時間目 2月21日(日) 5校時

目標	自己評価 (A)・B・C
それぞれの具体例のもつ役割について考えよう。	「学びの温度計」と「Gitter」
学んだこと (授業で学んだことや 自分で調べたことなど 100字程度)	筆者は「人と動物が共に暮らす」という主張をしていて、そのために必要なことが具体例にある。例えはオランウータンやパンダは環境を守る。パンダは本来の姿を知る。エゾウシカは動物は全て平等を求めている。
感想 疑問点	

津山西中学校 2年生国語科単元のまとめシート⑬

「動物園でできること」 単元まとめシート

2年

●単元目標

- ・読書を生活に役立て、思いや考えを伝えあおうとしよう。主体的に学習に取り組む態度
- ・文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えよう。思考・判断・表現
- ・文章の内容と自分の知識や経験を結び付け、考えを広げたり深めたりしよう。思考・判断・表現
- ・意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解しよう。知識・理解

●単元学習前の認識

- ・文章を読んで文章の構成や論理の展開、表現の効果について分かったことを書きましょう。

自分の思っている事を述べ、理由などを書いている。

●単元学習後の認識

- ・文章を読んで文章の構成や論理の展開、表現の効果について分かったことを書きましょう。
- ・文章の内容と自分の知識や経験を結び付け、考えを広げたり深めたりしたことについてまとめましょう。

なぜ筆者が3つの動物を選んだ意図は？

	オラニウ-ワニ	ハニギニ	エリニカ
① 役割	染むの場と帯むの場の <u>両立</u>	野生のほんらいの <u>たくましさ</u>	すべての動物の <u>すばらしさ</u>
② 生活 ⇒特徴がつかみ やすい動物	<u>高い場所</u> 地上から10〜20メートル	<u>海や水</u> 潜る深さ200メートル	<u>地面・陸地</u> 11イニカニワ、高い岩山
③ 問題 ⇒危機的状況 以外な一面	<u>環境問題やくらいつく 森林が失われている</u>	<u>環境問題や</u> 「かわいさ」ではない、 「うんちが」 たくましい	<u>害獣</u> 「見飽きた」 「憎たらしい」

●学びの活用

- ・今後の学習や生活の中でこの単元での学びをいつ、どのように活用したいかを書きましょう。

表現する時、詩などの文章を書く時。

●単元の自己評価

- ・読書を生活に役立て、思いや考えを伝えあおうとできた。(A・B・C)
- ・文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えることができた。(A・B・C)
- ・文章の内容と自分の知識や経験を結び付け、考えを広げたり深めたりすることができた。(A・B・C)
- ・意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解できた。(A・B・C)

I. 1. (11) 生徒主体の授業を目指した「ミニティーチャー」の実践

1 実践の場面

教科学習(2年生数学科における実践)

2 実践のねらい

学習時間の余裕を生み出し、様々な学習状況に対応できるようにする。

3 実践の内容

数学の授業において、教員からの説明を必要最低限にし、生徒同士が教え合い・学び合いの学習により、生徒が自ら学ぶような主体的な授業づくりを実践した。

生徒が授業内で達成すべき課題や問題を設定し、それを授業内で学級全員が達成できるような教え合いや学び合いをねらいとする。授業の序盤は、学習内容を教員が短時間で説明し、その説明や参考書を基に生徒が自力解決する時間を設ける。本時の課題が解けた生徒は一人ずつ教員へ見せ、合格を目指す。合格した生徒はその後に、ミニティーチャーとして他の生徒の学習支援を行う。どの生徒に教えてもらっても良いし、どの生徒に教えても良い。教え方も生徒に任せているが、生徒同士で教え合いや学び合いを行うルールとして、答えを教えるのではなく、考え方や道筋等を教えるのみとした。授業での教員主導の場面を必要最低限としているが、課題の内容や生徒の学習状況によって、必要なポイントを押さえる。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

教員の説明する時間を必要最低限にすることや、授業の進度スピード等を工夫し、1時間の授業の中や年間計画の中で生徒主体となる時間を生み出すようにしている。また、基本的には板書を写す等のノートを取ることはさせていない。

② 教員の関わり

教員は、その時間の学習内容の解説を短時間で行い、本時の課題の添削を行う程度にとどめている。また、課題が出来た生徒を全体に知らせることも教員の役割である。

③ 実践の過程

まずは、学力上位層が中心に教え合いを始めることをねらい、徐々にミニティーチャーの人数を増やすようにしている。

④ 活動の振り返りや評価

授業中の課題を達成した生徒を教員から教室全体に知らせることで、その生徒自身のモチベーション向上や「教わるができる人」として他の生徒へ周知させる。

⑤ 実践の準備

見たらわかるように学習内容が整理され、「こればできればOK」となるような問題が取り上げられている参考書をベースに授業を進めた。そういった副教材の準備が必要になる。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

この授業形態により、授業終了後の休み時間にも継続してノルマの課題を達成しようと教え合いを続けている姿が見られ、生徒の学習に対する意欲が見られた。また、生徒から教え合い・学び合いが楽しい等の声が聞こえている。今後は、授業中や年間の授業を通して、時間的余裕をもっと生み出すことで、応用的な内容や課題にも時間を割き、全体的な生徒の底上げをしたい。

I. 1. (12) タブレット端末を活用した主体的で探究的な授業づくり

1 実践の場面

教科学習(3年生国語科における実践)

2 実践のねらい

タブレット端末を用いることによって学習意欲を高めるとともに、生徒にとって主体的で探究的な授業となることを目指す

3 実践の内容

国語科の「古典」の単元において、教員から設定された課題について、生徒自身がタブレット端末で検索し、その内容をまとめる。本実践では、古典集(和歌集)について調べる授業であり、それぞれの歌集について「調べること」、それぞれの和歌集の特徴を「まとめること」、それぞれの和歌集を分類することを課題に設定した。課題について教師主体で教え込むのではなく、生徒が自分の力で調べ、情報を収集し、それらを生徒自身でまとめる。タブレット端末で調べることで多様な情報が収集できるため、幅広い視点や考え方で教材を捉えることができる。また、自分のペース、やり方で学習をすすめることができる(タブレット端末を操作することで自己解決ができる)ので、生徒にとって探究的かつ意欲的に学習に取り組むことができる。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

学習課題として、教員から「調べること」が与えられ、タブレット端末を用いて自分で課題について調べ学習をすすめる。調べた情報は生徒が自分で取捨選択し、それらを自分なりにまとめていく。タブレット端末を活用することで、自分のペースで学習をすすめることができ、それぞれの実態に応じた形で学習に取り組むことができる。

② 教員の関わり

授業の課題を設定すること以外は、生徒の自主性、主体性に任せている。タブレット端末で調べるため、それぞれのペースで学習をすすめることができるので、どのような情報を調べればよいのか、どのようにまとめればよいのか困っている生徒へのフォロー(個別対応)に時間を割くことができる。

③ 実践の過程

本実践に限らず、普段の授業から自分なりのまとめを行うことを習慣的にしている。まずは、自分でまとめを行うことに慣れさせ、後にタブレットを活用して調べることを加えることで、より主体的に学習を進めることができる。しかし、インターネット上にある情報をそのまま写すだけの学習になってしまいがちなので、情報を取捨選択することから慣れさせ、次第にまとめる作業に重きを置くようにするなど、段階を踏むことが必要である。

④ 活動の振り返りや評価

生徒の「調べよう」とする姿勢を肯定的に捉え、意欲的に学習に向かっているものとして評価する。さらに、ただ調べるだけではなく、それをまとめる手順や方法についても評価の材料としている。膨大な情報の中から必要な情報をまとめることができるようになることを目指す。

⑤ 実践の準備

一人一台のタブレット端末、生徒が何を調べてまとめるのかを明確にした学習課題の設定

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

タブレット端末を用いた授業であると生徒たちも生き生きして授業に参加していた。自力で調べる学習活動であるので、生徒はより主体的に取り組めた。また、生徒が自分で調べ学習をすすめていくため、自分のペースでの学習が可能となり、普段以上に困っている生徒へのフォローもできた。しかし、タブレット端末を使うことで、生徒が意欲になる反面、情報を取捨選択する力が必要である。

I. 1. (13) 生徒による説明を重視した実践

1 実践の場面

教科学習(3年生理科における実践)

2 実践のねらい

学習に対する興味・関心を生徒に持ってもらい、学びに対する姿勢の伸長を図る。

3 実践の内容

授業において、現象や実験結果等についての理由を、生徒が生徒自身の言葉で周囲に説明することを意識的に取り入れている。1年時の授業から継続的に取り組んでいるが、最初は穴埋め等の与えられた形式に沿った説明から慣れるようにした。学年が上がるにつれ、説明する機会を重ねることで、生徒独自の言葉で説明するようになった。現在の3年生では、生徒自身が考えた方法により説明するようになっている。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒が学習内容を説明する取組では、挙手制により生徒を指名しているが、説明する機会を経験させるためにも、機械的(席順等)に指名し説明することに慣れさせるようにしている。初めは穴埋めによる説明方法に慣れるようにし、生徒にとって習慣化するまでは取り組みやすい形式の準備が必要である。

② 教員の関わり

生徒が説明に詰まる時などは、生徒の言葉を引き出すように、授業者からの上手な問いかけが必要となる。

③ 実践の過程

1年時から意識的に「説明の機会」を取り入れているが、習慣化させるためには時間をかけて継続していかなければならない。

④ 活動の振り返りや評価

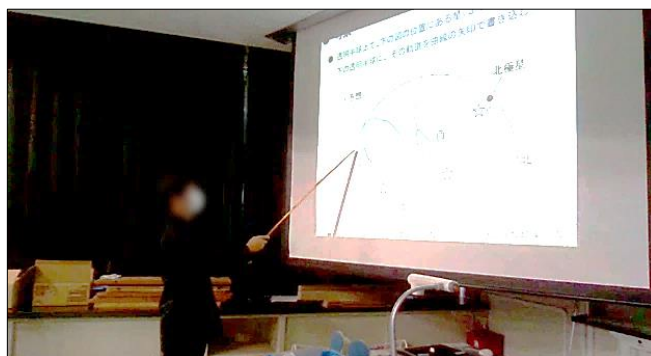
生徒の説明場面の後には、必ず教員からのコメントやアドバイス等により生徒に対するフィードバックを行っている。

⑤ 実践の準備

日頃から頻繁に生徒の言葉による説明機会を設けることが大切で、事前の準備物等は特にない。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

テストにおいての記述回答が以前は無回答が多かったが、生徒の言葉で説明する経験を重ねることで、自分の言葉での記述が増えている実感がある。生徒が自らの力で解決、進めようとする姿勢が見えたのも、正しい答えを出さなくても良いという実験特有の受容的な授業環境があったかではないかと考える。



I. 1. (14) 生徒が教員役を担う授業実践

1 実践の場面

教科学習(特別支援学級3年生英語科における実践) 知的障害特別支援学級3年生(4名)

2 実践のねらい

自分の気持ちを伝える場面を経験することにより、人前で説明する力を身につける。

3 実践の内容

知的障害特別支援学級での英語の授業の一環として、生徒自身が既習事項(単元)から、興味・関心がある単元や内容を選び、生徒が教員役を担い、英語の授業を行う。自分の思いや伝えたいことを表現することの難しさに気づき、人前で授業を行うことに挑戦する。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒が自ら学習内容を選択することで、生徒が自信を持って授業が行えるようにした。授業内容を決める際には、既習事項のプリントを振り返りながら生徒が自ら決める。

② 教員の関わり

教員役として授業を行うねらいとして、入試に繋がることや人前でしゃべることの重要性について教員から生徒に説明を行った。授業内容を決定する際には、教員は既習事項や単元内容の提示だけにとどめた。

③ 実践の過程

形も何もないところから生徒が授業を作ることは非常に難しいが、日頃の授業で「目標、基本文、作り方、訳し方」等の授業形式を生徒に習慣化させることが必要である。生徒が教員役を担って授業を行う際には、生徒が自ら普段の授業形式に当てはめていたので、生徒に任せて自ら判断させるためにも日頃の積み重ねが大切だと考える。

④ 活動の振り返りや評価

生徒が振り返りをする時間を設け、生徒同士の感想を共有出来るようにした。

⑤ 実践の準備

生徒が参考に出来るように「既習事項の一覧」の例示【資料I. 1. (14)-1】と生徒が記入しやすいような授業計画シート【資料I. 1. (14)-2】を準備した。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

今回の取組においては、生徒にとっての良い経験となった他、生徒に授業を任せ、その授業の様子から、生徒が普段の授業で何を理解できていないのかが教員にとっての発見に繋がった。生徒が教員役として授業を行った後は、「次回はこの単元の授業をやりたい」等の意欲を感じられる生徒と、トラウマになり苦手意識を持つ生徒の両方が見られた。授業内では、教員役の生徒が困惑するような質問を控えるなど生徒同士の気遣いも見られ、生徒の社会性の一面もうかがうことができた。特別支援学級では、生徒の特性などもあるので、生徒に任せても良いことと任せられないことがあり、学級全体や集団で自己決定をさせることは難しく、どうしても一人一人の個に応じた形になりかねない。



資料 I . 1 . (14) - 1 既習事項の一覧

3 年生の皆さん

授業の一環として皆さんに small teacher 授業をやっていただこうと思います。

授業内容は今までやってきた単元で一番自分が理解していると思われる単元です。

以下、参考にして自分はこれならみんなに教えてあげられると思うものを選んでみてください。今後の予定、準備は授業でやっていきましょう。

be 動詞と一般動詞の使い方

一般動詞の疑問文・否定文

一般動詞の過去形

命令文って何？どう作るの？「しなさい」「してはいけない」

疑問詞をつかった疑問文

未来を表す will と be going to

現在進行形と過去進行形

助動詞 can may must should の使い方

There is ～、There are～

比較級

最上級

不定詞と動名詞

接続詞

キチンと理解していないと出来ないものばかりです。でも、これは出来るってものを見つけていきましょう。今後、前に出てプレゼンできるようになる訓練にもなります。面接に向けての度胸もつきます。積極的に頑張ってみましょう。

I . 1 . (14) - 2 授業計画シート

目標：

基本文：

作り方：

訳し方：

練習問題

①

②

③

まとめ

質問はありますか？

I. 1. (15) 道徳の授業におけるOPPシートを活用した意見記入の実践

1 実践の場面

教科学習(道徳科における実践)

2 実践のねらい

生徒自身が道徳の授業において主体的に考え、OPPシートを通じて自分自身の変容をつかむことで、道徳的価値について考える姿勢を養う

3 実践の内容

一年間を通じて、生徒一人につき一枚ずつOPP(One Page Portfolio)シートを準備し、年間35時間ある道徳の授業で、自分の考えや意見、その授業内で思ったこと、考えたことを記入していく。記入したものは、授業担当教員がコメントや、ポイントを押さえ(下線を引くなど)生徒へフィードバックする。年間の最後には、生徒自身が自分のOPPシートを見返し、自分自身の考え方の変容について客観的に捉え、道徳的価値について考える姿勢を養うようにしている。また、毎時間記入することで、道徳の授業に対して主体的に取り組むような生徒の姿勢を図っている。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒は一人一枚ずつOPPシートを配布されており、毎時間の道徳の授業の終盤に記入していく。記入することは、その授業でのキーワード、授業を通して考えたこと(授業の教材に関すること、周りと意見を交流しての感想など)であり、その内容は生徒の自由としている。一年間の最後には、その記入内容を見返し、生徒が自分自身の変容を捉え、自分の振り返りとして活用する。

② 教員の関わり

教員は道徳の授業を行い、授業を担当した教員が、OPPシートを点検する。生徒が記入した内容に対してコメントを返したり、下線を引いてポイントを押さえるなどして生徒へのフィードバックを行っている。授業中の記入が進まない生徒に対しては、質問を上手に使いながら考えを引き出し、生徒の言葉で記述できるようにフォローしている。

③ 実践の過程

記入する内容は自由であるため、当初、生徒は何を書いてよいかわからない様子であった。しかし、一言でも、単なる感想でもOKとすることからスタートした。慣れてきたころから、友だちの意見を聞いた上で自分の意見を記入することを促した。

④ 活動の振り返りや評価

教員は、生徒が記入したことに対しては、決して否定せず肯定的に捉えるようにする。記入したOPPシートが生徒自身の自己評価の材料となり、生徒が自分で自分の変化に気づくことができる。道徳科における教員の評価の際にも、このシートを基にして生徒の変容を捉える。

⑤ 実践の準備

OPPシート【資料I. 1. (15)】、毎時間の授業の準備(生徒がしっかりと考えることができる教材選びと授業展開が大前提である)

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

この実践を継続することで、道徳授業の充実につながったことはもちろん、生徒も道徳的内容について、主体的に考える機会づくりとすることができている。徐々に「自分はこう思う」というコメントから「友だちの意見をきいて・・・」というコメントなどへの変化が見られることも増えていった。また、このOPPシートは道徳科のみならず、他教科でも活用されている。

1. どれだけの時間を大切に扱か
、時間の大切をあらためて、
知ろンセができた。
そして、心のバルは自分に何かを交付
せよとくれるとで、知ろンセ機
ができた。

2 思いのやり

Good!

あなたから、思いのやりは、17日夕方
に、お電話に、お電話の、お電話の
思いの、お電話の、お電話の、お電話の、
お電話の、お電話の、お電話の、お電話の、

3. 自分と他の最後とに一致する。
自分と他の事を決めた。決めた
事は最後と自分の心の中
を自分の心の中と一致する。
今、自分に決めた事と自分の心の中と一致する。

4. $r'wv'w'$ 的? $r'wv'v'$ 的? (32)

一言一言在木明に言齋發他を待て
いざいざいず。いざいずいざいざいざ
下を木明にいざいざいざいざいざいざ
いざいざいざいざいざいざいざいざ

[illegible]

6 夢の物語の1...

出会った人を大切に想うのが好き
を捨て、将来の夢に向かい
進むことにした。

夢の中に、どう、音段の生活が実現して、

7 秋葉に成りまはれた 人
 今更けに父の私母妹のむかし
女の心で謝りたてゐた人の時、
 時(さ)が、さうして、
 うん、~~秋葉に~~成りまはれた王様の時、
 王様の時、

8 誠實は生ずる 子に
善い心は生ずる 心は 155
至善の心は 155
至善の心は 155
至善の心は 155

9 物はたけり、くしきすか？
自分の事より荷を、見つけたりすか。
注意する。
見つけたりすか。
相手の気持ちを想像すれば、適切な
行動が見えたり。

10 個性

一人一人の個性を大切に、
自分自身を知る努力を心掛け
ることが大切だ。知ること
がまず第一です。

コリユツツエハ
ヒトヲシラベニシテ

[illegible][illegible]

3 SNSの使い方を教えて。LINEでメールの
大切さに気づけたね!
LINEとメール
LINEとメール、どちらも便利で、
メールは大切なメールはメール。
メールはメールでメールの人にメール、
メール。

14 選挙のしくみと
選挙の仕組み、選挙のしくみ、自分の
意見は大切にする。
選挙のしくみ、自分の責任を
自分の毎日も選挙だ、

15

いのちを助ける

命は「生かす」こと、生かすは「生かす」こと、命
は大切にしてほしい。

命は「生かす」こと、生かすは「生かす」こと、命
は大切にしてほしい。自分の命を大切に。

6 最後のリレー 
 勝ち負けがすべてを決定するのではなく、
 選手たちの心と体の成長、そして、
 選手たちの心と体の成長、そして、
 選手たちの心と体の成長、そして、

17
新丁、おたけい村のノコリ（レカ）
ツクサギンカ「オキタ」ノミカガハ
シ。オキタの村に大月10日
にはおたけい村。少しも憂鬱で居るこ
うではな

18 "鹿島の笑ひ"を親友に
落語の文化史、日本の文化について
しめしめあかきこと、知ることになり
た。それ、自分の生き方もおもしろ
いからなれやう。

又、鹿島の人々を愛する心は

I. 2. (1) 自主練習ノートによる家庭学習の定着

1 実践の場面

教科学習、家庭学習(1年生英語科における実践)

2 実践のねらい

生徒が自分に合った学習内容、学習方法を自身で見出すことで家庭学習の定着を目指す

3 実践の内容

英語の提出課題の一環として、自主練習ノートを課している。家庭学習の定着をねらいとして実践しており、定期的に提出する機会を意図的につくっている。自主練習ノートの中身は生徒の自由な活用を基本としているため、英単語を複数回書いてくるものや文法や英文についてまとめを行ったものなど、様式は生徒によって様々である。単語練習の単なる繰り返しに終わるのではなく、生徒自身による「独自の工夫」がなされた自主練習ノートを目指すようにしている。そのため、単語の繰り返し練習よりも、生徒が自分なりに工夫して学習内容をまとめたりすることに重きを置いた評価をしている。生徒自身が個々にあった学習方法、学習内容を探りながら、学習を進める実践である。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

自主練習ノートを用いて、自分なりに英語の学習を行う。自主練習用に自分で一冊のノートを用意し、そのノートに英単語の繰り返し練習、学習内容のまとめ(文法について、英文をつくるポイントなど)などを行う。内容については自由であり、自分に合ったやり方、内容を選ぶことができ、自分で学習の質を高めることができる。課題の一環であるので、ノルマのページ数のみ設定されており、課せられたページ数分(それ以上のページ数でもOK)の自主練習ノートを定期的に提出することになっている。

② 教員の関わり

自主練習の内容は、生徒自身に任せているので、細かな内容の指示は行っていない。生徒が自分にあった方法や内容を自分で選び、工夫した学習にすることにポイントがある。定期的に提出する課題になっているので、ノートの提出状況とノートの内容の点検を行っている。

③ 実践の過程

実践を開始する際に、ノートの記入例を示しながらシステムについて説明を行い、後は定期的に課題として提出機会を設けた。序盤は単語の練習が中心になっていた。学習が進むにつれ、文法や英文作成などの内容を自分なりに工夫してまとめる生徒が増えてきた。

④ 活動の振り返りや評価

提出物として評価を行うが、「自分なりの工夫」に重きをおいているため、工夫がなされた自主練習ノートには高い評価を与えている。ただし、自分なりの練習をすることが大切で、その生徒の実態にあわせて評価している部分もある。内容が優れている自主練習ノートは廊下に掲示することで、他生徒への模範となると同時に掲示された生徒の自己肯定感の向上につながる。

⑤ 実践の準備

一人一冊の自主練習ノート【資料 I. 2. (1)】、内容の優れた自主練習ノートのコピーを掲示

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

きちんと出すことを評価することで、自主練習ノートを習慣化している。提出を重ねるごとに、進歩が感じられる実践になっている。自主練習ノートの中で、独自にテストを行う、ワークやプリントなどを自分なりにまとめる、などの工夫が多く見られるようになった。生徒が自分自身を見つめ、自分に合った学習のやり方を見出している。

I. 2. (1) 自主練習ノート

基本文 Did you get up early yesterday? あなたは昨日、早く起きたか。

- Yes, I did. [No, I did not.] (2) 肯定文 [いいえ、起きてません。]

ポイント 過去の疑問文は主語の前にdidを置き、否定文は動詞の前にdid notを置く

I got up early yesterday.

例 Did you get up early yesterday?

- Yes, I did. / No, I did not. didを覚えて答える

例 I did not travel this winter. 動詞の前はdid not、edはつけない

① 過去の疑問文

・「主語は...はるか」は <did + 主語 + 動詞の原形...?> で表す。

② 過去の否定文

・「主語は...はるか」は <主語 + did not + 動詞の原形...> で表す。

③ 動詞の形

・didを供、疑問文や否定文では、動詞は、edのつかなかった原形(動詞)になる。
↳ didがつけなくていい!!!

(1) (Do / Did) you visit your grandfather yesterday?

(2) (Does / Did) Saki study last night?

(3) My sister (do / did) not skate this winter.

Unit 8 ~

(1) I (am / is) running now. 今、3歳の子供と説明してる。

(2) The girls (is / are) waiting for the player now. are

(3) My father is (plays / playing) the guitar. playing

(1) Jim is (use) a computer now. using

(2) They are (speak) English now. speaking

(3) The boys (is) playing baseball now. are

私は今、泳いでいます。 I'm swimming now.

エリックは今、ピアノを弾いています。 Eric is playing the piano now.

彼らは今、昼食を食べています。 They are having lunch now.

私は春を待ちえています。 I'm looking forward to spring.

またね。 See you.

(is / with / Alex / shopping) Anne. Alex is shopping with Anne.

(juice / they're / drinking) They're drinking juice.

Makoto and Yumi (talking / are / nature / about) now.

Makoto and Yumi are talking about nature now.

I see fireworks every summer.

例 I saw fireworks that night. 過去形(不規則)

例 Ken saw fireworks that night. 主語以外は不規則

① 不規則動詞に変化する動詞の過去形

・動詞に(ed)をつけたら不規則に変化する動詞がある。
・edをつけた動詞 → 「規則動詞」
・不規則動詞 → 「不規則動詞」

② 不規則動詞の例(原形 → 過去形)

go → went get → got say → said

Ken (have) breakfast at six this morning. had

I (feel) so happy. felt

We (take) some pictures yesterday. took

Alex (go) to bed before nine yesterday. went

My mother (say), "Do your homework." said

Yui (went) to school with her sister. went

Shota (stood) near the big tree. stood

Yumi (studied) English last night. studied

I got up early yesterday.

例 Did you get up early yesterday?

- Yes, I did. / No, I did not.

例 I did not travel this winter. = didn't

① 過去の疑問文

・「主語は...はるか」は <Did + 主語 + 動詞の原形...?> で表す。

・肯定文 did + 主語 Yes / No で答える

・否定文 did not → didn't

② 過去の否定文

・「主語は...はるか」は <主語 + did not + 動詞の原形...> で表す。

③ 動詞の形

didを供、疑問文や否定文では、動詞は、edのつかなかった原形(動詞)になる

My sister (do / did) not skate this winter. did

Did you listen to music last night? - Yes, I did.

Did Mari watch TV last night? - No, she didn't.

Did you travel this winter?

(did / travel / you) this winter?

Did your friend play soccer yesterday?

(your friend / soccer / did / play) yesterday?

I. 2. (2) 自主学習ノートと振り返りシートによる実践

1 実践の場面

教科学習(2年生社会科における実践)

2 実践のねらい

生徒自身が自分の興味・関心に基づく学習に取り組めるようにする。

3 実践の内容

社会の週末課題として、自主学習ノートを課し、学習内容は生徒が自由に自分で選択することで生徒が主体的に取り組む課題とした。また、単元毎に振り返りシートを準備し、授業での学びを生徒自身の言葉で振り返り学習内容の定着を図った。

自主学習ノートでは、テスト前であればテスト範囲の内容、その週に授業で学習した内容、好きな単元内容等をノートに記入している。現状として、生徒の中には1ページ以上を提出している生徒も多くいる。自主学習ノートについては、内容が整理されているものを学年の廊下に掲示することで、他の生徒とも共有することができ、ノートの記述形式の例示、見本とすることとした。また、掲示された生徒にとっては自己肯定感の向上をねらいとした。

振り返りシートでは、単元を貫く課題を教員が設定し、それを踏まえて毎時間の取組を本時の目標に沿う形で、生徒自身が自分の言葉で記入するものである。単元の終わりに、これまでの振り返りを基に初めに提示した課題に答える取組を行った。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒の中には、何をやったら良いのかわからない生徒もいるので、教科書の丸写しでもOKにする等、自主学習内容の許容範囲を広げた。

② 教員の関わり

取組の初めに、自主学習ノートで何をすれば良いか等の模範例を示し、助言するだけにとどめた。

③ 実践の過程

生徒が自主学習ノートに取りかかりやすくするためにも、ノートの記述形式例を提示することから始めた。

④ 活動の振り返りや評価

一部生徒の自主学習ノートを廊下や文化祭等にて掲示することで、生徒の意欲向上と記述の工夫を生徒間で共有できるようにした。

⑤ 実践の準備

自主学習ノートの記入例と振り返りシート【資料I. 2. (2)】を準備した。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

生徒が自ら興味ある内容を自主学習に選択することで、未学習の学習内容まで自主学習ノートに記述する生徒も見られた。その自主学習が予習となり、自主学習した内容が授業において扱われると意欲的な学習姿勢になる姿が見えた。

しかし、試験で点数を取ることを重視する場合、プリント学習の方が効果的かもしれない。今後の実践としては、生徒が主体的に取り組むプリント学習へ発展させていきたい。例えば、単元別プリントボックスを設置し、生徒が自分に必要な単元を選び取り組む等していきたい。また、自主学習ノートとプリント学習のどちらかを選ぶ形式も良いと考えている。

資料Ⅰ. 2. (2) 振り返りシート

第2編第3章1節 九州地方・環境問題・環境保全に向き合う人々の暮らし

2年()組()番 氏名()

**単元
の
課題** 九州地方では、これまでにどのような問題があったか、その後は
何を目標してがんばっているのかを図を使って述べることができる。

※各時間の振り返りや考えの変化を記入する。

タイトル	1	2	3
振り返り (タイトル とリンクす るように)			
タイトル	4	5	6
振り返り (タイトル とリンクす るように)			

九州の説明をするのに使う図を三つ選んで貼り付けよう!!

一つ目の図



二つ目の図



三つ目の図

【図を使いながら、これまでの九州地方の課題とその後の展開について述べる。】

評価の目安

- ・図を使って説明している=B
- ・図の関係性に注目し、図を効果的に使い説明している=A

I. 2. (3) 生徒が自ら内容を選び、取り組む家庭学習

1 実践の場面

教科学習、家庭学習(2年生国語科における実践)

2 実践のねらい

生徒が主体的に学習に取り組むような家庭学習の習慣化と基礎学力の定着

3 実践の内容

毎週の週末課題として、「主体学習シート」を課している。学習する内容については生徒が自由に自分で選択し、レポート形式で記述するものになっている。学習内容は何にするのか、その内容を選んだ理由(何のためにするのか)を明確にすることになっており、生徒がしっかりと目的意識をもって家庭学習に取り組むように工夫している。レポートの中身も基本的に自由であり、生徒が独自に調べたこと、授業内容を自分なりにまとめたものなど様々な内容になっている。また、シートには取り組みに関する自己評価も含まれており、生徒が自分の学習について振り返りを行う機会を意図的につくっている。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

週末の課題として「主体学習シート」に取り組む。シートにおいて学習することは、自分で自由に選択でき、自分で決めることができる。ただし、学習する内容とその意義については、明確にする必要があり、それを踏まえたレポートの内容にしていく。レポートの中身については、自身で調べたこと、授業のまとめなど自分で決めることになっている。シートの最後には、学習の意義、表現内容、提出期限について自己評価し、自分の学習について振り返りを行う。

② 教員の関わり

シートの記入について、初めに説明を行ったのみで、シートの中身については生徒の意思に任せているので、教員の関りは少ない。提出したシートを評価すること、よいものをファイリングして生徒間で共有できる環境を整える程度である。

③ 実践の過程

特に段階的な過程を踏んではいないが、この実践を継続することで、生徒自身も要領をつかみ、次第に質の高い家庭学習とすることができている。

④ 活動の振り返りや評価

シート内で生徒自身が自己評価をする部分があり、自分の学習についての振り返りを行うことになっている。また、教員からも評価を行い、内容の質が高いものは、生徒が自由に閲覧できるように共用のファイルにファイリングし、お手本とできるようにしている。以上のような、自己評価、教員からの評価、生徒間による評価の形で評価ができるようにしている。

⑤ 実践の準備

生徒分の「主体学習シート」【資料 I. 2. (3)】、閲覧可能な共用ファイル、テスト前についてはテスト対策の学習とする目的でレポート内容のテーマ設定をする。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

学習方法の基礎づくりとして生徒が自分に必要なことを自分で考えて行う習慣が定着してきたので、今後はさらに発展させていきたい。今までの宿題では気づけなかったこと(何を勉強すればよいのか、どのように勉強すればよいのか)に気づけたなどの感想が見られた。今後も同様の実践を継続し、より主体的な学びにつなげていきたい。

津山西中学校 2年生国語科

主体学習シート

No. 42 実施日：令和4年3月3日(木) 2年[]

学習内容(何をするか?)：芥川龍之介について。

学習意義(何のためにするか?)：知るため。

◎芥川龍之介：(一八九三～一九二七)

辰年辰月辰日辰刻に生まれたので
龍之介。

文学

拔群の秀才であった芥川龍之介は、
24歳で発表した「鼻」が夏目漱石
の激賞を受け、はなばなしく文壇
に登場。初期には古典説話に
取材し、登場人物の心理を理治
的に解釈して見せた。中期には
現在も多くの学生に読まれている

「蜘蛛の糸」「杜子春」「トロコ」

などを見聞雑誌「赤い島」に発表。

その後自伝的小説を書くが、

晩年には神経すい弱にかかり

将来に対する「ぼんやりした不安」を

抱いて自殺した。この時期の作

品には時代や自己への悩みが

色濃く表されている。

自己評価	感想・今後の学習への課題	評価
・学習意義のある学習にすることができた。(A・B・C)	他の作家の作品	
・丁寧に文字や線を書くことができた。(A・B・C)	などについて調べて	
・提出日までに取り組むことができた。(A・B・C)	みた。	

I. 2. (4) 自主参加型の質問教室と補充学習の活用による学習支援

1 実践の場面

教科学習(数学を中心とした5教科【国語・数学・英語・理科・社会】における実践)

2 実践のねらい

生徒の自立的な学習の支援と基礎学習の定着

3 実践の内容

テスト前や長期休業期間、3年生の入試時期に生徒が自らの意思で参加する補充学習の機会、生徒が自由に学習内容について質問をすることができる場(質問教室)を設定している。補充学習、質問教室ともに参加の強制はなく、生徒が参加したいと思えば参加できることになっている。放課後の時間や学校が休みの日に時間を設定している。生徒が自ら苦手な部分(単元)やわからない問題を持参し、教員に質問し、教えてもらうことになっている。一人で勉強がなかなか進められない生徒に向けての支援であるとともに、生徒が自立的に学習に取り組むことを目指している。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

担当教員により補充学習や質問教室が設定されるため、日程を確認し自らの意思で参加を判断する。補充学習については数学が中心となっているが、質問教室はテスト前の時期に行われることが多く、5教科(国語・数学・英語・理科・社会)の中から選択することができる。とくに決まった学習材料は準備されておらず、生徒が自らわからない単元やわからない問題を持参し、教員に教えてもらうシステムである。また、勉強法についても聞くことができるので、自らの学習に役立てることができる。

② 教員の関わり

補充学習や質問教室の開催を呼びかけるのみで、参加に関しては生徒の意思に任せている一方、中には教員から「参加してはどうか」と声をかけることはある。しかし、最終的には生徒の判断になっている。生徒からの質問などに答えることやアドバイスをするのみで教員から具体的な学習を促すようなことはない。

③ 実践の過程

特別な段階を踏むことはなく、補充学習、質問教室の設定をしている。課題や提出物を課すことは普段から行っており、その内容について質問する生徒もいることから、普段から学習する材料がある程度与える必要がある。

④ 活動の振り返りや評価

参加は自由であるため、評価というよりは、生徒に寄り添うようなスタンスに立っている。学習に対する意欲は認めて、その意欲が持続するよう前向きな言葉かけを行っている。

⑤ 実践の準備

補充学習、質問教室の開催予告の準備をする。放課後を中心とした時間の確保と場所の確保が必要である。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

参加の自由を生徒に委ねているので、参加している生徒は意欲的に学習に取り組んでいる。生徒が自ら質問し、今後どのような学習をすればよいのか助言を求める姿もあった。他方、参加してほしい生徒が参加していないという実情があり、完全に生徒の意思に任せることも大切ではあるが、ある程度、教員からの働きかけ(参加を呼びかけるなど)が必要である。

I. 2. (5) タブレット端末の活用による自己調整学習

1 実践の場面 教科学習(5教科【国語・数学・英語・理科・社会】における実践)
2 実践のねらい タブレット端末を活用により、生徒の自己調整学習を推進する
3 実践の内容 5教科(国語・数学・英語・理科・社会)を中心にタブレット端末を用いたドリル学習を行う。定期テストなどの直前にテスト勉強を各自で行う時間が設定され、その時間においてタブレット端末を活用して学習することができる。どの教科を選択するかは生徒の自由であり、学習内容を自分のペースで進めることができる。単元など自分自身がどこまで学習を進められているかが把握できるため、生徒が自分自身の進度に合わせて学習することができる。生徒が自分の判断のもと、教科、学習内容を選び、どこまで学習が進んでいるのかを確認しながら自分に合った学習を行っている。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 テスト前を中心に、テスト勉強の時間が設定され、その時間中においてタブレット端末を用いて5教科(国語・数学・英語・理科・社会)の中から自由に教科や学習単元を選択し、自分のペースで学習を進める。学習内容を選択できる自由はもちろん、学習ドリル内において、どの単元、どの学習内容が理解できているのか(正答できているのか)を把握できるため、自分の理解度を確認しながら学習することができる。 ② 教員の関わり 生徒が自分で学習内容を決めるため、教員が関与することはほぼない。生徒自身がタブレット端末内の学習ドリルにおいて、どこまで学習が進んでいるかなどを把握できるため、それをもとに生徒は自分の判断で学習を進める。 ③ 実践の過程 以前は、テスト勉強の時間を設けても提出物を作業的にこなす(答えを写すだけなど)状況があり、生徒が自分に合った学習を進めることができていなかった。今回の実践により、少しずつ生徒自身が自分に適した学習を進めることができるようになった。特別な過程はないが、今までの学習手段を変えることで、生徒の意欲に変化をもたらしている。 ④ 活動の振り返りや評価 生徒の学習内容についてはタブレット端末内において、自動的に評価や振り返りが行われ、生徒がどの教科、どの単元、どれほど理解ができているかなどの評価を教員が行うことはない。生徒が選んで自ら進めた学習であるため、教員が否定的な捉え方をすることはない。 ⑤ 実践の準備 一人一台の生徒用タブレット端末の確保、生徒がタブレット端末で学習が十分できる時間の確保が必要である。
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) タブレット端末を用いることで、生徒は興味をもって学習に取り組んでいる。学習に対して苦手意識をもっている生徒ほど、ノートや教科書などを中心とした学習よりもタブレット端末を活用した学習に意欲的に取り組んでいる。テスト前になると、生徒から「タブレット学習をしたい」という声があがることもあり、タブレット端末のドリルの内容にもよるが、生徒によっては効果的であると考え。

I. 3. (1) 選択式小テストの実践

1 実践の場面

教科学習(2年生理科における実践)

2 実践のねらい

生徒がより効果的に学習に取り組めるようにする。

3 実践の内容

学習内容を振り返る小テストの種類を生徒が選ぶ実践である。自分の学習状況に応じてテストの難易度を選ぶような習熟度小テストを実施している。

出題範囲となる単元別プリント(今までは提出課題にしていたもの)を生徒に配布し、そのプリントから出題される問題が指定された「基本的内容のテスト」と、同様のプリントから出題されるが出題範囲が広い「発展的内容のテスト」を準備した。生徒が自分に合ったレベルを目標に頑張り、意欲関心を持って主体的に学習に取り組むことをねらいとしている。基本的には生徒が自分の判断でテストを選択しているが、基本よりも発展を目指すように生徒へ投げかけている。今までは、提出物として単元別プリントを生徒に課していたが、生徒にとってはやらされている印象を抱きがちで、この小テストにより力がつくこと、後々の定期テストの学習に繋がることを生徒に意識づけるねらいがある。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

この取組を行うにあたって、課題等の提出物をなくした。答えを転写するだけの提出物は無意味と考え、選択式の小テストにより、生徒にとって意味ある学習の実現をねらっている。また、基本問題よりも発展問題の方が成績に優遇されることを生徒の伝えることで、中間層にも発展問題を解くよう促している。

② 教員の関わり

生徒が小テストの問題を選択する際には、生徒によっては、実態にそぐわない問題を選択することもあるため、実態にあった方を選ぶように教員から助言する。また、判断に迷っている生徒に対しても助言をしている。

③ 実践の過程

事前に準備テスト(模擬小テスト)を行い、生徒に自身の現在の力をつかませるようにした。

④ 活動の振り返りや評価

小テストの成績は評価の関心・意欲の観点に加算し、今後の評価観点の変化に対応しようと考えている。

⑤ 実践の準備

単元別テストから出題が指定された基本的内容のテストと出題範囲が広い発展的内容のテストの2種類の小テストを準備した。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

今回の取組を通じて、生徒が小テストに向けて、前向きに意味ある学習ができているのではないかと感じる。理科を苦手に行っている生徒や意欲が感じられなかった生徒が、問題を頑張って解いている姿が見えたり、何とか答えようとする様子が回答から見えた。中には、提出物を成績の頼りにしていた生徒からの不満もあったが、やれば点数がとれ、力になることを実感し前向きに取り組めるようになっていく。今後もこの小テスト形式を継続して取り組もうと思っている。

I. 3. (2) 生徒の主体的な学習を促進するための小テストの実践

1 実践の場面

教科学習(3年生理科における実践)

2 実践のねらい

生徒の主体的な学習を促進し、生徒の意欲を客観的に計ることをねらった。

3 実践の内容

3年生の理科において、小テストを実施している。テスト範囲は、1・2年生での学習内容としており、復習も兼ねている。2週間に1度を実施時期としており、継続的に定期的に小テストを行っている。テスト問題は全員が共通したものであり、テスト受験の際は、持ち込みを可としている。持ち込みを可としている資料は、専用の用紙に生徒自身が学習内容をまとめたものに限定しており、その用紙を作成することも生徒の主体的な学習となるようにしている。持ち込みでの受験と持ち込まずでの受験で点数割合に違いを設定しているが、持ち込み用の資料も成績に加味することで生徒の意欲向上につなげる。

新学習指導要領に沿った評価観点の変更もあり(4観点から3観点へ)、教員の主観で測りがちな、生徒の意欲を数値として客観的に計るねらいもある。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒の基礎学力の定着が大きなねらいではあるが、小テストに向かう姿勢や努力などの頑張りと過程を教員が意識的に見るようにしている(結果よりも過程を重視したい)。

② 教員の関わり

テストの点数などを参考に、生徒の実態に応じて持ち込み資料を作った方がよいなどの助言を行っている。生徒が持ち込み資料を作成しやすくするために、生徒が作成した持ち込み資料を例示して参考にできるようにする。お手本として例示されることで、生徒の意欲向上も期待できる。

③ 実践の過程

以前は、生徒の実態に応じた生徒が難易度を選択できる小テスト(習熟度の小テスト)を実施し、生徒のレベルに応じた基礎学力の定着をねらいとしていた。今年度は、生徒の意欲や主体性の向上やその評価に重きを置く小テストとした。

④ 活動の振り返りや評価

小テストの点数を評価に加味しているが、小テストで点数が取れない生徒に関しては、持ち込み資料を成績に加味するなどして、意欲(結果より過程)を評価している。

⑤ 実践の準備について

持ち込み資料作成用の様式【資料I. 3. (2)】と小テスト問題の作成

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

頑張っているが点数がとれない生徒(低学力の生徒)の成績を救うことができ、生徒の主体性を評価することができた。点数だけでなく、頑張る意欲が見える(評価できる)ようになった。生徒自身が持ち込み資料を作ることで、自分に合った学習方法を見出している。

第3回 「整理と対策」 テスト 持ち込み資料

26 C

像 { 虚像 ... 凸レンズを通して物体より大きく同じ向きに見える像 (物体が焦点より内側)
 実像 ... 物体が焦点より、外側にいるとき、物体から出て凸レンズを通った光が集まってできる像

反射の法則 ... 光が反射するとき入射角と反射角は等しくなる。
 音の反射 ... 平らではない物体の表面で、光がいろいろな方向に反射すること。

光の反射 ... 光が物体に当たって、はね返ること。
 音を出すものは振動している。空気を振動させて、次々伝わる。
 音の大きさは振動で変わる。強いほど振動の大きさが大きい。
 音の高さは振動数で変わる。1秒間に振動の回数を数える。
 ① 重力 ... 約100gの物体にはたらく大きさは1N。
 ② 圧力 (Pa) ... 1N/m²。100gの物体にはたらく大きさは1N。
 ③ 屈折角 ... 屈折光と法線の間にできる角。
 ④ 空気 ... 空気からガラスへ入射角 > 屈折角、ガラスから空気へ入射角 < 屈折角。

⑤ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑥ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑦ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑧ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑨ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑩ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。

⑪ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑫ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑬ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑭ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑮ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑯ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑰ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑱ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑲ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。
 ⑳ 音の伝わり ... 音の伝わりは振動の伝わり。

3年

第3回 「整理と対策」 テスト 持ち込み資料

11 C

・光源: 自ら光を出す物体。光の直進: 光がまっすぐ進むこと。像: 鏡にうつった物体のし。光の反射: 光が物体に当たってはね返ること。屈折角: 境界面に垂直な線と屈折光との間にできる角。凸レンズ: 中央部分が中央より厚いレンズ。焦点: 凸レンズを通った後に屈折して集まる点。焦点距離: 凸レンズの中心から焦点までの距離。音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。

・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。

・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。

・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。
 ・音の伝わり: 音の伝わりは振動の伝わり。

3年

I. 4. (1) タブレット端末を活用した職業調べの実践

1 実践の場面

進路学習(1年生総合的な学習の時間における実践)

2 実践のねらい

必要な情報を生徒自ら取捨選択し、自分の考えをまとめ、表現する力を身につける

3 実践の内容

1年生の総合的な学習の時間において、自分の興味関心のある職業について、学習をすすめていく。その中で、生徒が自由に選んだ職業について、タブレット端末で検索し、職業に関する内容をスライドにまとめる。職業調べの通例としては、図書の活用や家族などへのインタビュー形式ですすめていくことが多いが、タブレット端末の検索エンジンを活用することで、調べられる範囲を広げた。インターネット上なので多くの情報があるため、生徒が自ら情報を取捨選択する判断能力の育成にもつながる。また、スライドにまとめ、グループ内やクラス内で発表を行うことで発信力の向上も期待できる。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒は自由に、自分が興味関心のある職業を決め、その職業に関することをタブレット端末で調べていく。調べた内容については、4～8枚のスライドにまとめ、その後にグループ内で発表、グループの代表者がクラス内で発表を行う。

② 教員の関わり

スライドにまとめる際に、必ず盛り込む内容や項目(必要な資格、仕事の内容、中学校卒業後の進路など)をいくつか指定するが、それ以外の内容については、生徒が自由に決める。スライドの内容の例示を行い、生徒が作成のイメージをつかめるようにしている。

③ 実践の過程

いきなりタブレット端末を使つての調べ学習を始めるのではなく、職業や進路について段階的に学習を進めたうえで今回の実践を行っている。そうすることで、最終的に職業について調べてまとめる際に、何を調べればよいのか、こういった情報があるとよいのかをつかみやすくしている。

④ 活動の振り返りや評価

生徒に自由にまとめを行わせているので、生徒がまとめたものに対しては、教員は肯定的に評価するようにしている。また、発表の際に、生徒間で発表に対するコメントを記入し合うことで、生徒同士で評価を行うようにしている。

⑤ 実践の準備

まとめのスライドの例示、タブレット端末(一人一人に割り当てられたもの)

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

以前の調べ学習では、図書の活用や、家族へのインタビューなど、限られた範囲での学習をすすめるしかなかった。しかし現在は、タブレット端末の検索機能を上手に活用することで、生徒も意欲的に取り組んでいる。調べるだけでなく、自由にスライドを作成し、その内容を発表(プレゼン)することで、相手にわかりやすく伝えようとする力が身についた。また、発表の際、聞く側の生徒も意欲的で、興味をもって聞いていた。

I. 4. (2) 生徒の自己肯定感の向上を目指す探究活動

1 実践の場面

探究活動(2年生総合的な学習の時間における実践)

2 実践のねらい

生徒主体の探究活動を通じて、生徒に達成感を実感させ自己肯定感の向上を目指す

3 実践の内容

「SDGs」をテーマに、生徒が主体的に課題に向き合い、課題を解決する探究のプロセスを意識した総合的な学習の時間である。はじめに、全体でSDGsの概要について学び、その後は生徒が興味関心のある内容、探究したい内容を17の目標の中から自由に選択し、グループ分けを行う(ただし、人数の関係で人数調整あり)。グループ分けの後は、各グループ内で興味、探究内容の関連性の強い生徒同士でさらに小グループを編成し、自由に探究学習をすすめる。探究学習の中では、生徒発案での活動(実践)(書き損じはがきの収集、ジェンダー平等についての全校アンケートなど)を行い、その内容を生徒が自分の言葉、自由な形式でまとめ、発表する。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

学級単位で、SDGsの概要について学習すること(教員が主ですすすめる学習)からスタートする。その後、生徒が自分で興味関心のある内容を17の目標から選択し、各グループに分かれて学習や活動をすすめる。各目標の中で関連性の強い生徒同士の小グループをつくり、目標に沿った学習をすすめ、自分たちにできる活動を自由に考案、実践し、その内容を生徒自身で自由にまとめる。また、まとめた内容については発表する場が設けられており、その発表を聞き生徒同士で相互に評価する。

② 教員の関わり

具体的な活動内容までは手をかけていないが、すべて生徒主導では活動が前進しないことも危惧されたため、ある程度の方向性や具体的活動例を挙げるなどして、手助けを行った。アイデアを教員から提案して、実働を生徒に任せるようにした部分もある。

③ 実践の過程

SDGsに関する基本的概要は、最初に知識として教員から伝達する形になっているが、活動をすすめていくほど、生徒の主体性や自発性が生かされるようにした。序盤には活動を進める上で教員の先導が若干必要であった。今回の総合的な学習のみならず、年度当初から生徒が主体となり活動していく場の設定が必要である。

④ 活動の振り返りや評価

発表の際に生徒がお互い「なるほど」(この実践のサブテーマが「たくさんの『へえ〜』と出会おう」)と思ったことをコメントで評価し合うことで、相互に評価することや主体的実践を経験させることで生徒に達成感を味わわせる。

⑤ 実践の準備

SDGsに関する資料を用いて概要について触れる。各グループで活動実践を考える際に参考となる具体的活動例を準備しておく。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

生徒が主体的に考え、活動する取り組みとすることができた。活動している生徒の様子も、とても意欲的であり、生徒発案の取組を生徒自身が進めることがとても有意義であったと感じる。生徒の活動のまとめである発表をオンラインで保護者へ配信し、生徒は達成感を得たようである。今回の活動が単発的に終わるのではなく、今後も教科を横断した探究的な学習を継続していく必要がある。

1. 4. (3) タブレット端末を活用した主体的な学びにつながる総合的な学習

1 実践の場面

タブレット端末を使った活動(3年生総合的な学習における実践)

2 実践のねらい

生徒が自ら興味あるものを調べ、その内容を自分なりに表現できるようにする。

3 実践の内容

3年生の修学旅行に向けての事前学習の一環として、旅行先(京都)について、タブレット端末を使い、生徒自身が興味あることを調べ、その内容をスライド作成でまとめ、発表を行った。観光地、文化、お土産の3つのカテゴリーに分け、そのカテゴリー内で、自由に調べてスライドにまとめ、各学級で発表をする(1人1作品のスライドを作成する)。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

カテゴリーを観光地、文化、お土産の3つに設定することで、調べ学習開始時に何について調べればよいかを明確にする。また、全員が発表する場を設けることで、全員が意欲的に取り組めるよう、工夫した

② 教員の関わり

生徒の自主性、主体性に任せ、生徒の調べる内容については肯定的に評価するようにした。教員はただネット環境の専念し、生徒がタブレット端末を活用しやすいようにしたかったが、実際は生徒の方が端末操作や設定に詳しく、そういった場面も生徒の活躍の場とした。スライドの例示などは、2年時の調べ学習(高校調べ)でスライド作成のイメージがつかめているため行っていない。

③ 実践の過程

タブレット端末の操作方法については、定期的に行い、スライドの作成方法については、事前に学習した(2年時の高校調べなど)。今回の実践では、「修学旅行に関すること(観光地、文化、お土産のカテゴリー)」を与えるだけで、調べる過程やスライドの作成過程、発表過程については生徒の自主性に任せた。活動を進める中で、生徒同士で教え合う場面が自然と生まれた。

④ 活動の振り返りや評価

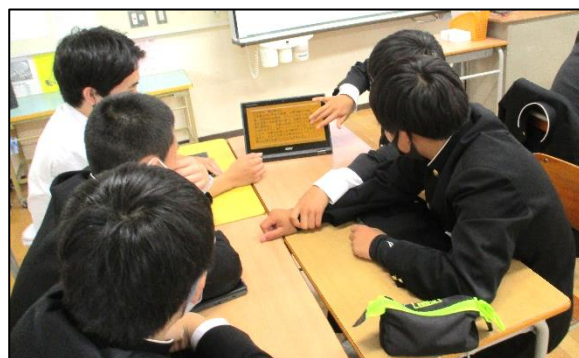
班の中で、カテゴリー分けを行い、スライドが完成したら、そのカテゴリーごとに集まり発表を行う。カテゴリー内で相互評価(生徒同士で評価)し、よいものを各カテゴリーの代表として学級全体の場で発表を行うことで、自己肯定感の向上につながるようにした。

⑤ 実践の準備について

タブレット端末、ネット環境を整備し調べやすい環境

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

生徒は意欲的に楽しそうに活動しており、修学旅行に向けて、よい事前学習となった。タブレット端末を活用しての調べ学習では、教員への負担も少なく、生徒の活動内容が確保しやすく、生徒の主体的な活動となっていたと感じる。タブレット端末を上手に活用することで、生徒の主体的な学習となることも期待できるが、生徒にとって十分で余裕のある時間設定が必要であることがわかった。



Ⅱ. 1. (1) 班長会を核とした学級経営

1 実践の場面

学級活動(1年生班長会における実践) 班長会(6名)

2 実践のねらい

生徒が広い視野や思いやりを持ち、自発的に行動できるようにする。

3 実践の内容

班長会を主体として学級をより良くする取組や生徒考案による席替えを行った。学級にてアンケートを実施し、問題点を具現化し学級運営における改善策を生徒主体で考えた。

また、投票による人選で席替え委員を新たに決めたこともあり、班長会に限らず、生徒が主体となる組織を新たに学級内に作った。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

班長会の招集は、学級の状態や様子に応じて教員から呼びかけるが、班長会での話合いの主体は生徒とし、学級の課題の改善策や様々なアイデアを出す場としている。

② 教員の関わり

教員のアドバイスは最小限にし、生徒の発案を大切に扱う意識を教員側が持つようにした。

③ 実践の過程

話合いの基本は、自分たちの現状を振り返ることから開始し、班替えや改善策の発案に繋げるようにした。

④ 活動の振り返りや評価

班長会での話合いや取組を学級全体に広げることで、班長に立候補する生徒が増える等、学級の中で班長会の活動や取組に対する印象や魅力が向上している。

⑤ 実践の準備

班長会の話し合いの場には、ホワイトボード等を活用し、可視化できるような工夫を行った。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

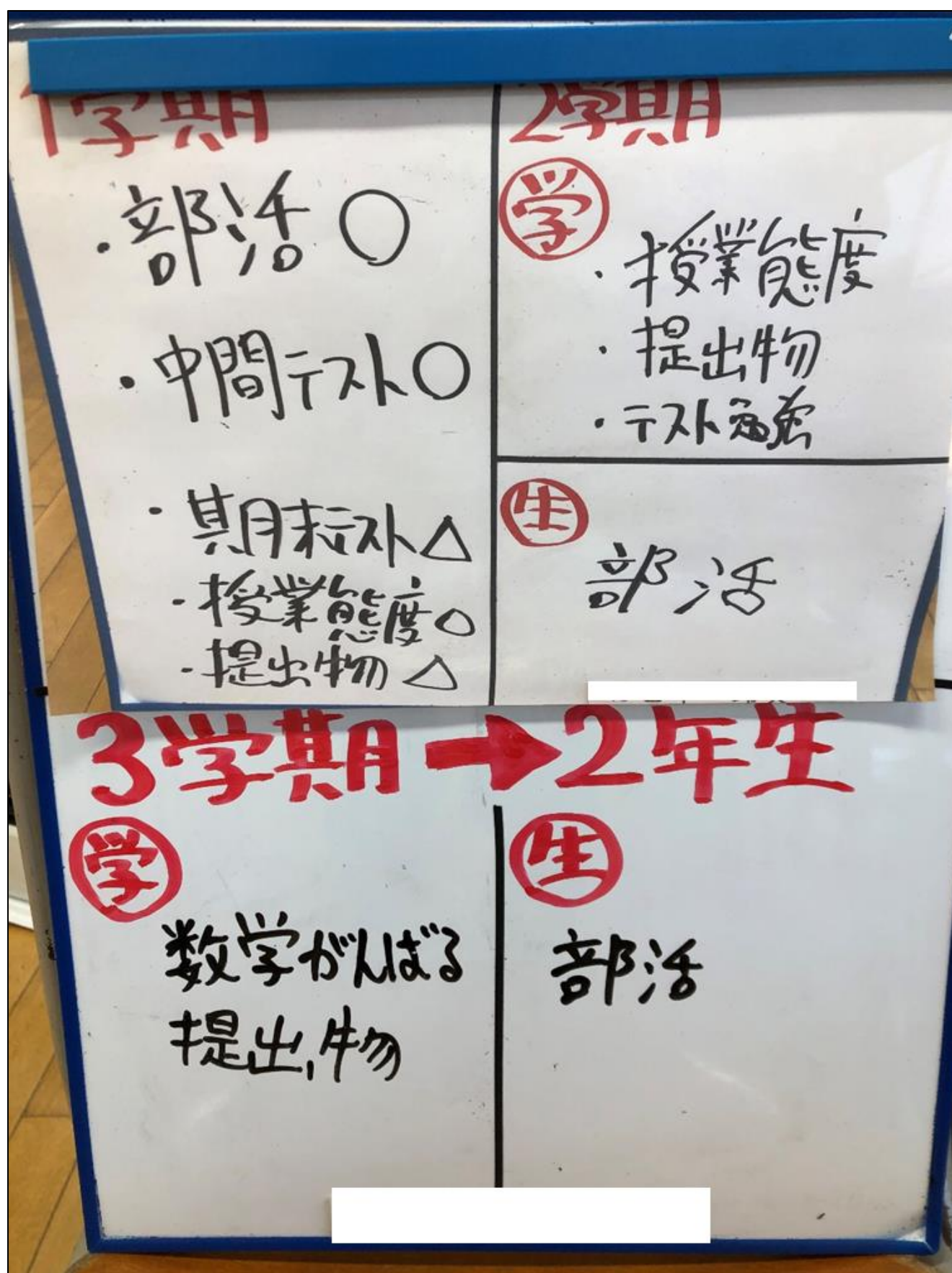
話し合いの場を班長会から学級全体に広げることにより、責任を1点集中型(〇〇さんは△△をする)から選択の幅(〇〇さんは△△～□□のどれかをする)を設けるような給食の改善システムが生まれ、当番活動を疎かにする生徒が減ったことや、班長による授業遅刻点検によりチャイム着席が徹底されつつある様子がうかがえる。いずれの取組も、特に学級における主体的に行動する姿があまり見られない生徒に効果が顕著に見られ、周りに流されず学校生活を送る生徒の姿が増したように感じる。取組を行った後も、提出物の収集方法等の係活動を、効率的に進める改善策や工夫が生徒自身から自然に発案されるようになった。また、班長を経験した生徒には自覚ある行動が見られるようになり、他の生徒も自ら班長をしたいという意欲が増えたように感じる。

今後の実践として、席替えを班長会で決めるだけでなく、他の方法を生徒自身から提案できる機会を意識的に作るようにしたいと考えている。



Ⅱ. 1. (2) 生徒を主体とした振り返りと目標設定の実践

1 実践の場面 学級経営(学期末懇談における実践)
2 実践のねらい 生徒自身による学校生活の振り返りと目標設定を行い、生徒の主体的な学校生活を助長する
3 実践の内容 学期末に行われる三者懇談において、教員からの一方的な話や保護者からの話で終わってしまうのではなく、生徒自身の言葉で、その学期の振り返りを行い、次学期に向けての目標設定を生徒自身の言葉で行う。その際には、その振り返りと目標設定を文字として残しておく。その目標設定したものを、再び次学期の懇談において取り上げることで、生徒が自分で決めたことを生徒自身で評価し、のちの学校生活に生かしていく。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 懇談を行う学期の振り返り、反省と次の学期に向けて、学習面(授業に関すること、具体的な成績に関すること、家庭学習に関すること、提出物に関することなど)での目標と生活面(規範意識や学級活動や当番活動など学校生活に関すること、生活習慣に関すること、部活動に関することなど)での目標を生徒自身で設定し、ホワイトボードに具体的に記入、記録することで、後の学校生活に生かし、再度、学期末の生徒自身による振り返りや懇談での振り返りに生かす。 ② 教員の関わり 振り返りや反省、目標設定のいずれも生徒自身の言葉で行うようにする。教員が誘導することは避け、生徒から出てきたものは決して否定せず、肯定的に捉える。しかし、個に応じてより高みを目指した目標設定をするような助言をすることはある。 ③ 実践の過程 懇談前に学級活動の時間内で、選択式の簡単な振り返りシートを用いて学期の反省を行っている。懇談内でいきなり目標設定を行うのではなく、まずはその学期の反省を行うことで、その反省を生かした目標を設定しやすいようにする。目標設定、実践、反省、改善のPDCAサイクルの実践となっている。 ④ 活動の振り返りや評価 設定した目標をホワイトボードに残すことで、次学期の振り返りや学期末の三者懇談に再び自己評価を行い、その後の学校生活の充実、改善に生かすようにしている。 ⑤ 実践の準備 反省と目標を記入するホワイトボード【資料Ⅱ. 1. (2)】、記入したものを写真で記録に取りプリント化したもの
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) 三者懇談では、教員や保護者が一方的に話しがちであるが、生徒の声を中心に懇談を進めることで、生徒の今後の学校生活の意欲につながると考えている。生徒の中でも「させられる」感覚ではなく、「自分で決めてする」という感覚で、何を頑張らなければならないのか、明確な目標を持ちやすくなり、生徒自身が目標を設定することで、主体的な学びや生活が期待できる。次の学期では、生徒が前の学期の反省を生かし、前向きな言動が見られるようになった。



Ⅱ. 1. (3) メッセージカードを活用した自己肯定感向上を目指した取り組み

1 実践の場面

学級活動、学年団経営(1年団における実践)

2 実践のねらい

メッセージカードを通じて、自分たちの長所に気づかせることによる自己肯定感の向上を目指す

3 実践の内容

生徒同士で、お互いに普段言えていない「感謝」やお互いの「良い所(長所)」に目を向けさせ、お互いに自由な内容でメッセージカード(good behavior カード)に記入し、交換する。また、普段の生活の中で何気ない生徒の行動や発言を教員が拾い上げ、その言動を評価したものを共有できる場所(廊下など)に掲示し、生徒の自己肯定感の向上を目指す。生徒が他者の長所に目を向けることや受け取ったカードを通じて自分自身の長所に気づかせることや周囲から認められることによって、ルールを守る重要性に気づかせること、自分の学級や学年の現状を把握し改善点を考えさせる機会としている。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

学級活動の時間を活用し、生徒間でメッセージカード(good behavior カード)に自由な内容で「感謝」や「良い所(長所)」を記入し、お互いにカードを交換する。教室内部での隣の席同士に記入し合うことから始め、学級内の友人や学年内の友人など、記入する相手を段階的に広げる。記入例としては、「仲良くしてくれてありがとう」、「係でもないのに、床に落ちているプリントやゴミを拾いキレイにした」、「係の仕事を手伝ってくれた」、「よい声かけをしてくれた」などの記入がある。

② 教員の関わり

教員はメッセージカードを配布するのみで記入内容は生徒が自由に決める。ただし、道徳的な部分について配慮し、記入する内容のある程度の制約(人権的なことや相手の立場にたつての内容など)を設けている。また、教員が普段の生徒の様子から、「よい行い」や「よい発言」を拾い上げ、同様の様式のカードを廊下などの共有部分に掲示し、生徒の自己肯定感の向上につなげるようにしている。教員からのカードには、学年団を超えた教員からの記述もある。

③ 実践の過程

最初は、学級活動の中で取り組みの説明、記入内容についての制約(道徳的な部分)について触れた。学期に数回、記入する時間を設け、生徒の誰もがメッセージカードを受け取れるように席の隣同士にメッセージを記入することから始め、学級内、学年内と範囲を広げていった。

④ 活動の振り返りや評価

メッセージカードを受け取ることで、普段の自分の行動が評価されていることに気づくようにしている。また、教員からの評価を掲示し、それを生徒が目にすることが自己肯定感の向上や、自分自身、学級や学年をよりよくしていく意識につながるようにしている。

⑤ 実践の準備

メッセージカード(good behavior カード)、掲示用のカード

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

生徒がお互いの「良い所(長所)」に目を向けることで、人間関係の構築にもつながっている。カードを記入している様子も穏やかな表情でよい雰囲気で行えている。カードを交換することで、自分自身で気づいていない一面を発見できた様子も見受けられる。肯定的内容が生徒の生活意欲の向上となり、規範意識の向上につながっている。また、教員からの掲示を見て、評価されている喜びを感じている。

Ⅱ. 1. (4) 生徒の自治能力を高める、生徒による授業態度評価の実践

1 実践の場面 学級経営(自治的活動における実践) 1年生学級(40名)
2 実践のねらい 生徒自身による評価と教員からの評価によって、生徒の自治能力を高める
3 実践の内容 授業の様子によって、教員と生徒(学級代表)が、授業態度を評価し、ポイント化していく。教員と生徒の評価はそれぞれ独立しており、生徒自身の評価は学級代表が独自に学級全体を評価する。評価されて得たポイントも、教員からの評価よりも生徒の評価の方が大きく(5倍)、生徒自身の評価に重きがおかれている。ただし、授業態度が良くない場合はマイナスポイントもあり、これも生徒の評価の方が大きく(5倍)なっている。期間(およそ3週間)内での合計ポイントの目標値を設定し、それを達成できるように生徒間での声掛け等を行っている。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 授業態度をより良くするために、学級代表が毎時間、授業の様子を独自に評価し、ポイントを集計していく。教員も評価を行うが、教員は1ポイント、学級代表は5ポイントと差をつけており、生徒自身の評価に重きをおくことで、生徒同士の声掛け等の自治活動として位置付けている。良くない授業態度であればマイナスポイント(-1ポイントと-5ポイント)となり、期間内の合計ポイントで目標値達成を目指す。達成時には、生徒発案のレクなどを実施する。 ② 教員の関わり 教員も授業の様子を評価するが、生徒の評価とは別に行うため、生徒の評価との相違がある。定期的に合計ポイントについて学級全体で共有し、反省する点や改善する点について生徒自身で考える時間を設けるようにしている。 ③ 実践の過程 今回の実践に取り組む前は、授業規律の確立を目指し、最初は生徒同士の呼び掛けなどの自治活動があった。しかし、効果が授業によって異なることや継続しにくい面があった。そこで、目に見える形(評価をポイント化する)で評価するという今回の実践を行った。学級代表が独自で評価をするため、事前に学級代表のリーダー性の育成も必要となる。 ④ 活動の振り返りや評価 教員からの評価と生徒(学級代表)からの評価がポイントとして可視化されているため、定期的に合計ポイントを確認することで、振り返りや今後の意欲につなげる。また、教員だけでなく、生徒自身の自己評価もあるため、生徒の自治活動につながる。 ⑤ 実践の準備 ポイントを可視化したカード【資料Ⅱ. 1. (4)】、カードを蓄積するボックス
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) 教員からの評価だけでなく、生徒が独自に生徒自身を評価するので、生徒が教員からの評価より受け入れやすくなっているように感じる。そのため、生徒も自らすすんで反省したり、今後どうすればよいかについて生徒自身で考えるようになった。また、評価が可視化されていることで、生徒自身も自分たちの頑張り具合いを把握でき、目標を持ちやすかったようである。



... 1イカ GET!!
(先生が「頑張ったじゃなイカ!!」と思ったら GET!)



... -1イカ GET!!
(先生が「頑張っていないじゃなイカ!!」と思ったら GET!)



... 5イカ GET!!
(学級代表が「頑張ったじゃなイカ!!」と思ったら GET!)



... -5イカ GET!!
(学級代表が「頑張っていないじゃなイカ!!」と思ったら GET!)

※ 先生も学級代表も、
「うーん、どっちとも言えないじゃなイカ」と思ったら0イカ!

Ⅱ. 1. (5) 生徒の自己評価と生徒間相互評価を生かした取り組み

1 実践の場面 学級経営(2年生の学級における実践)
2 実践のねらい 規範意識の向上、自己肯定感の向上をねらい、進路意識を高める
3 実践の内容 高校入試時の調査書や指導要録の行動の記録(基本的な生活習慣、健康・体力の向上、自主・自律など)の項目に準じて、生徒間で相互評価を行い、結果を掲示し、生徒の自己肯定感の向上をねらっている。相互評価の投票は、クラス内で毎月1度行っており、男子・女子1名ずつを記名することになっている。相互評価の投票と同時に、投票に使う1枚のシート内に自己評価も含まれており、他者評価と自己評価を同時に合わせて行う。毎月あがってくる名前が変わり、その変化により生徒の意欲向上にもつながっている。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 1人1枚の投票用シート(年間通じて同じシートを使う)に毎月、自己評価と他者評価を行う。他者評価では、行動の記録(基本的な生活習慣、健康・体力の向上、自主・自律など)の項目に準じて、日頃の様子から判断し、それぞれの項目にふさわしいと思う生徒を選び、記入する。それぞれの項目には同じ生徒の名前を記入してもよく、複数項目に渡って名前があがる生徒もいる。 ② 教員の関わり 投票の方法など、自己評価・相互評価について説明し、その中で、生徒間での評価とすること(自分たちの意思や考えで決める)をポイントとして押さえた。投票用のシートを用意、配布し、毎月の投票を集計し、毎月の結果を教室に掲示する。生徒の名前をあげることで、生徒の自己肯定感を向上させる。 ③ 実践の過程 4月当初から、自己評価と相互評価を行うことを生徒に周知させ、実践をスタートした。段階的にステップを踏んでいくわけではなく、毎月継続することに重きを置いている。また、継続的に行うことで、毎月の自己の変化や投票された結果に変化が見え、生徒の意欲づけにつながっている。 ④ 活動の振り返りや評価 生徒自身が自己評価を行うことで、反省、次への改善を意識できるとともに、相互評価自体が、生徒への評価になっている。また、結果を集計、掲示することで、自己肯定感の向上、翌月の相互評価へのモチベーションの向上をねらっている。 ⑤ 実践の準備 投票用シート(人間力向上シート) 【資料Ⅱ. 1. (5)】、集計結果の掲示
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) 毎月、結果の変化を見て、名前があがった生徒は喜んでいたり、以前は名前があがっていたのに、名前が無くなった生徒は、反省や次への意欲的な姿勢が見られた。この集計結果を見ることで、教員からの印象と生徒間の印象の差から、生徒の新たな一面を発見することができ、教員の見えていないところが見えることがある。

人間力向上のためのチェックシート

～社会で通用する人間を目指して～

○自分の人間力を自己評価しよう。(よくできている…○、できていることもあるが、そうでないときもある…無印、あまりできていない…△)

[illegible]

○特に自分が頑張りたいことを書きましょう。（「できた！」「できなかった…」が分かりやすい目標設定にしよう。）

[illegible]

○ クラスのメンバーの人間力を評価しましょう。(最もできていると思う人の名前を男女それぞれ1人ずつ書きましょう。)

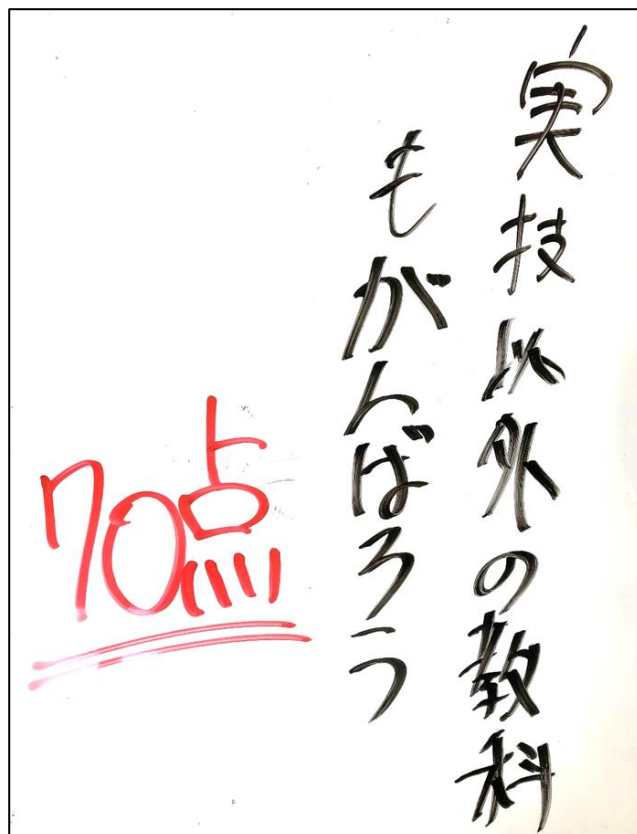
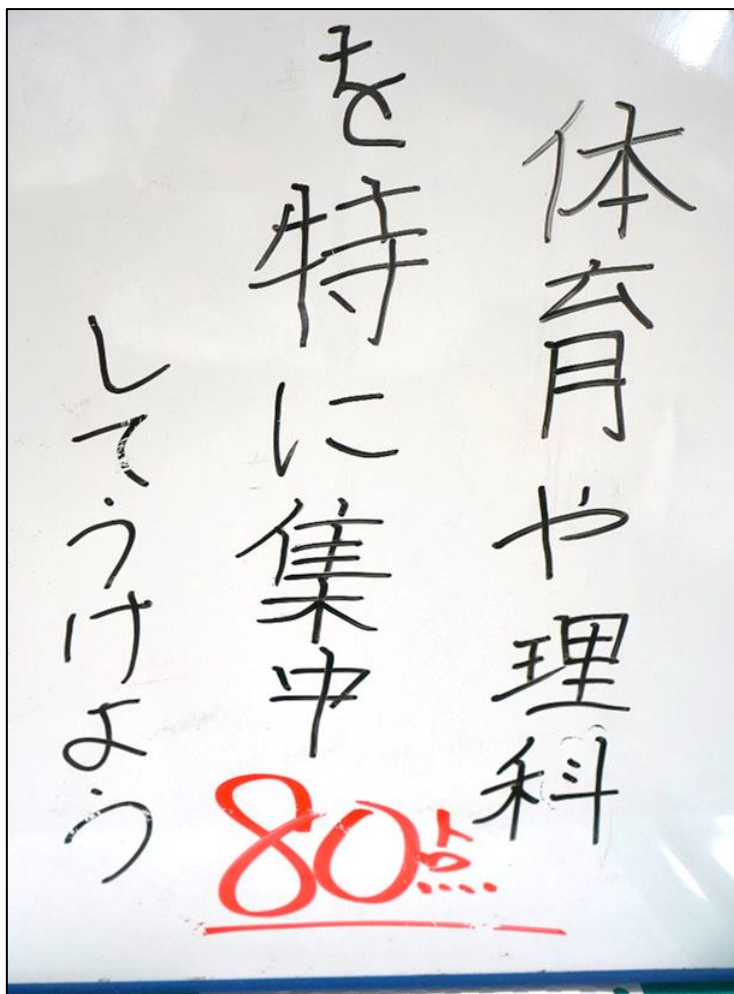
[illegible]

Ⅱ. 1. (6) 1 分間スピーチによる自己表現活動

1 実践の場面 1 分間スピーチ(3 年生短学活における実践)
2 実践のねらい 自分の考えを他者に伝えるための(入試の面接を見据えた)経験を積ませることをねらいとした。
3 実践の内容 放課後前の短学活の時間において、3 年生の全学級で生徒一人ずつに「1 分間スピーチ」をする時間を毎日設けている。生徒の全員が必ず話すようにし、初回は「自分の将来について」のテーマのもとスピーチを行っていく。2 回目のスピーチでは「おもしろい本の紹介」と「気になるニュース」の 2 つのテーマから選択できるようにした。ちょっとした隙間時間(学活の余った時間など)にスピーチ内容を考えさせるなど準備の時間も確保した。スピーチを聞いてのコメントを記入し、生徒同士でフィードバックするなど、生徒間の相互評価を行った。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 スピーチのテーマは与えられるが、スピーチ内容は生徒の自由であるので、生徒自身の言葉で自分の考えを表現できるようにする。スピーチ用の原稿用紙によりスピーチ内容を考えやすいようにしている。また、「気になるニュース」などのスピーチテーマについては、タブレット端末を活用することで、生徒自身でテーマに関することを調べることもできる。 ② 教員の関わり スピーチ内容について教員は関与せず生徒の自主性に任せているが、生徒の実態や個に応じてスピーチ内容のアドバイスや声かけなどを細やかに行うようにしている。 ③ 実践の過程 何もない状態からスタートしたわけではなく、年度当初に「自分の将来について」のテーマでの作文を書いているため、スピーチ内容の材料として扱った。スピーチを行う前に、スピーチ内容の材料を作る(準備する、集める)時間を十分に確保するようにしている。 ④ 活動の振り返りや評価 スピーチ後に教員から質問をしてスピーチ内容を広げることや教員からのフォローを行っている。また、生徒同士でスピーチに対してのコメントを記入することで、相互評価をしている。その評価は、生徒自身にフィードバックするとともに、学級通信などに掲載することで自己肯定感の向上をねらっている。 ⑤ 実践の準備について スピーチ用の原稿用紙、スピーチ内容を考える時間の確保、生徒同士の相互評価用のコメント記入用紙を準備した。
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) 初めは、不安そうな様子もあったが、何人かの生徒のスピーチを聴いていくうちに、そのような不安は見られなくなり、比較的しっかりとスピーチができていた。しかし、同じテーマ(「自分の将来について」)のもとスピーチを行っていると、順番が後半の生徒の時にはマンネリ化した様子もあった(同じような内容になっていた)ため、テーマを個別に決めることも良いかと考える。人前で話す、自分の考えを伝える場の経験にはなっているが、もっとスピーチのやり方など事前の段階のことをしっかりと行っていれば、よりよいスピーチになったかもしれない。

Ⅱ. 2. (1) 生徒による生活目標の設定と自己評価を生かした委員会活動

1 実践の場面 委員会活動、学級活動(自治的学習における実践) 1年生学級代表委員会(6名)
2 実践のねらい 生活目標を設定し、自己評価することで自分自身や学級を客観視し、生徒の向上心を培う
3 実践の内容 委員会活動の一環として、毎日の生活目標を立てて、その振り返りを行う取り組みが企画された。それを学級独自の工夫として、委員会で立てた生活目標に対する評価を委員会に所属していない生徒が日替わりで行い、目標達成具合を点数化する。委員会が目標を立てて、その振り返りを行う取り組みはよく見られるが、その振り返りや自己評価を委員会に所属していない生徒が行うことで、生徒自身に学級の状況を「自分ごと」として捉えるようにし、安心安全な学級づくりを目指した。自己評価の点数は生徒の自由な感覚でつけているが、“なぜその点数なのか”という理由まで含んだ内容で発表するようにしている。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 委員会に所属した生徒が、授業を中心とした、その日の生活目標を自由に設定する。その日の帰りの会で、設定した目標に対する振り返り、自己評価を行う。自己評価は委員会に所属していない生徒が日替わり(ランダム、教員が指定)で行い、達成具合を点数化する。また、点数をつける際には、自分自身の言葉で“なぜその点数をつけたのか”について説明を加えて発表する。 ② 教員の関わり 目標設定や自己評価に関しては、生徒に任せており、教員がそれに対して関わりを持つことはない。教員は目標、点数に対しての講評を行うが、その講評が前面に出ることないようにするとともに、生徒の意思や判断、評価が今後に生かされるように配慮しながら講評を行うようにしている。 ③ 実践の過程 目標設定とその振り返りについては以前より行っており、学級代表など特定の生徒に限られた活動であったため、今回の実践では委員会に所属していない生徒も巻き込むような形にし、生徒にとって「自分ごと」である取り組みになるようにした。 ④ 活動の振り返りや評価 生徒自身の自己評価を点数化することで、学級の状況を把握しやすくした。また、自己評価の内容を生徒に任せているため、教員からの講評はできるだけ否定的な内容にならないようにし、肯定的な内容にしている。 ⑤ 実践の準備 目標を記入するホワイトボード、目標を設定する時間と自己評価を行う時間の確保
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) 目標設定を立てることやその振り返りについてはよくある取り組みである。今回のように委員会に所属している生徒だけでなく、所属していない生徒も取り組みにしっかりと関わらせることで、自分の考えを持つ機会とすることができ、それを発信する経験を積むことができた。一人一人の採点基準や価値観が異なるので、毎日の点数の発表を聞いた生徒の反応も日替わりで興味深いものであった。



Ⅱ. 2. (2) 学級代表委員会による学級課題の解決

1 実践の場面

委員会活動(自治的活動における実践) 1年生学級代表委員会(8名)

2 実践のねらい

生徒自身が課題や改善点を考える経験を積むことで、学年全体を生徒主導で動かせるようにする。

3 実践の内容

学級の課題について学級代表委員を中心とした生徒自身で考えた後、一週間単位の生活目標を立て、その振り返りと改善策、達成状況に応じた次なる目標設定を生徒自身で行った。生徒自身の考えや声だけで目標設定とその振り返り、達成度合いの確認を行う。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

教員が生徒のアイデアや考えを前面に出すという姿勢でいることが大切で、生徒に主体を任せることを意識していた。

② 教員の関わり

教員は、目標設定に対するアドバイスや手法(課題の見つけ方や目標設定の過程等)について提案し、生徒が後の活動の中身や実際の取組自体に関して考えた。

③ 実践の過程

教員が生徒に「自分たちで考え、進める」と言うことを伝えることから始め、その場でアイデアを出すのではなく、「〇〇についての改善策のアイデア」を次回の委員会を出し合えるように、生徒に考える時間を与えるようにした。

④ 活動の振り返りや評価

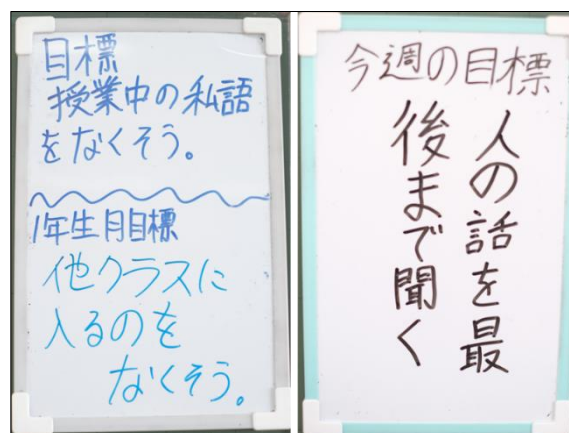
委員会内で取組について生徒自身が振り返りを行う時間を設けた。生徒の中では、改善までは至っていないが、歯止めがかかった実感があったため、その部分については教員からも評価するようにした。

⑤ 実践の準備

ミニホワイトボードを準備し、目標を共有できるように工夫した。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

学級の課題を把握することやその改善に向けた具体的な目標を生徒主体で決めることにより、学級代表が学級全体を見渡せる(視野を広く持つ)ようになったと感じる。生徒にテーマを決めさせ、生徒同士の討論会を持ちたい。全員が参加するような学級会議(学級をよくするため)を行う。生徒発信の課題解決をしたい。



Ⅱ. 2. (3) 学級代表委員会による目標設定および目標達成の実践

1 実践の場面

委員会活動(自治的活動における実践) 2年生学級代表委員会(8名)

2 実践のねらい

生徒の自立を促し、生徒自身が自分で考え解決する力や、周りに発信する力を身につける。

3 実践の内容

各学級において3段階となる小さな目標を学級代表委員会で設定し、理想のクラス像に近づける自治的活動を行った。

まずは目標設定から始め、その際には、目標の例を教員が提示し、それを参考に目標を生徒が各学級の実態に応じて自由に設定した。学級代表委員が中心となり、設定した目標を学級全体で挙手により達成度合いを確認する。学級で達成できたと判断した後は、次の段階の目標を設定し、再び達成度合いを確認していく。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

どのような目標を設定しても良いという教員の姿勢によって生徒主導の活動になる。

② 教員の関わり

基本的には、教員は何も言わないスタンスで目標を立てる際に若干アドバイスをした程度で、生徒に活動の主体を委ねるようにした。

③ 実践の過程

今回の取組に限らず、1年時から、廊下を走らない取組やチャイム着席の取組、授業中私語チェック等を生徒が自発的に計画、実施しており、そういった生徒の活動を教員が受け入れることを継続してきた。

④ 活動の振り返りや評価

学期末には委員会内で成果を振り返り、次年度の2年生(後輩)へ引き継ぎ事項としてまとめた。

⑤ 実践の準備

目標設定のための、目標の例示一覧【資料Ⅱ. 2. (3)】を準備した。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

生徒主体の活動とすることで、教員が干渉しなくとも、生徒たちだけで考えて動いた取組になった。教員が主導となっていないため、毎週末で良い達成度合いの確認も生徒の判断によって毎日行っている学級も見られた。また、「次の学期には〇〇なことをしてみたい」や「他の委員会と連携した取組が行いたい」と発言する等、生徒が自分たちの考えを積極的に出すようになり、次の取組や活動に向けて意欲的になることが出来る経験となった。

学級代表委員の生徒たちは、自分たちの手で学年をより良くしたい(自治活動を行いたい)と思っているようで、取組における罰則等も生徒自身で考えている。2年時の学級代表委員会に限った雰囲気ではなく、1年時から「学年を自分たちの手で良くする」という学級代表委員会の雰囲気が生徒自身によって創られてきた。



2年生『みんなで目標達成プロジェクト』

2年()組

理想のクラスを作るためにどんなことができるようになってほしいか。

- (例) ・チャイム1分前着席
- ・チャイムまでに授業準備完了
 - ・授業はじめと終わりのあいさつがきちんとできる
 - ・授業中の私語や勝手な行動なし
 - ・授業中に挙手で、発表ができる。
 - ・授業中の発表で、きちんと敬語が使える
 - ・クラス全員が、自分の係・当番活動をすることができる
 - ・給食の準備が2年生で1番早い
 - ・2年生で1番教室がきれい
 - ・全員のロッカーが整理整頓されている
 - ・廊下を走らない
 - ・全員、3点セット（名札、マスク、ハンカチ）がそろっている

小さな目標を1つずつクリアしましょう。『他人ごと→自分ごと→みんなごと』

クラスでアンケートを取って、達成度を確認



第1目標（ホップ）

「

」

第2目標（ステップ）

「

」

第3目標（ジャンプ）

「

」

理想像

「



」クラス

Ⅱ. 2. (4) 委員会活動と連携した規範意識の向上をねらった実践

1 実践の場面
委員会活動(自治的活動における実践) 2年生学級代表委員会(8名)
2 実践のねらい
生徒の規範意識の向上とリーダー育成
3 実践の内容
生徒に学年の様子についてアンケートを取り、その結果を基に目指すべき生徒像(レベル4「他の人に発信できる」、レベル3「言われずにできる」、レベル2「言われたらできる」、レベル1「言われてもできない」)を提示し、目指すべき目標を生徒自身が立てる(学級代表がどのレベルの生徒像を目指すべきか決めた)。アンケートを学年全体で取り(9、12、3月)、そのアンケートの変化を委員会で分析し、学年の現状を掴み、よりよくする工夫、取り組みなどを考える。アンケートと同時に目標を達成するために、何ができるか具体的行動を考える。学年集会などを活用しながら、アンケートの結果や目標達成の具体的提案を提示し、全体への呼びかけを行う。
4 実践の留意点・工夫点
① 生徒の活動
9月に目指すべき生徒像(レベル4「他の人に発信できる」、レベル3「言われずにできる」、レベル2「言われたらできる」、レベル1「言われてもできない」)についてアンケートを学年全体で取り、目指すべき目標を立てる。また、個人単位で目標達成のための改善策を提案する。学級代表委員会でアンケートを分析し、具体的な改善策を考える。学年集会を活用して、その結果や呼びかけを発信していく。これらを9月、12月、3月の3回実施し、次年度につなげていく。
② 教員の関わり
教員は、アンケートの作成やこの取り組みをスタートさせるために生徒への提案を行った。取り組み始動は教員発信ではあるが、実働を生徒に任せていくことで、後々は生徒発信で継続していく。
③ 実践の過程
目指すべき生徒像を1つの学級で掲示したことからスタートし、他学級にも波及し、目指すべき生徒像が学年全体に周知された(1学期)。それに対するアンケートや学級代表の取組を2学期から始め、アンケート、分析、改善策の提案、学年集会での発信を3度行い、学年全体で改善に取り組む。最終的には次年度につなげ、生徒による自治的活動に発展させていく。
④ 活動の振り返りや評価
アンケートの結果を掲示すること、学年集会で発信していくことで、取組の効果を見えるようにする。また、生徒が個人単位で考えた具体的改善策の提案の中から良いものを廊下に掲示したり、取り上げて発表に盛り込むことで、生徒の自己肯定感の向上をねらっている。
⑤ 実践の準備
目指すべき生徒像の掲示、アンケート用紙、説明用のプレゼンテーション、具体的改善策の掲示用シート
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)
様々な場面で教員が生徒に声をかけるときに、指導ではなく、「レベル〇〇を目指そう」などと声をかけることで、生徒の中でも明確な目標を持てるようになっていく。生徒間でも同様な声掛けが見られ、自治能力が育ちつつある。現時点では、教員が手をかけている部分もあるが、生徒に少しずつ任せ、最終的には完全に生徒主導としていきたい。

Ⅱ. 2. (5) 学級代表委員会による学級の理想像の実現

1 実践の場面 委員会活動(自治的活動における実践) 3年生学級代表委員会(8名)
2 実践のねらい 生徒にとって理想的な学級に向けて、現状に応じた具体的な行動が生徒主体で出来るようにする。
3 実践の内容 学級代表委員会において生徒自身が学級の理想像を考え、その理想像の実現のために3段階の目標設定を行った。 目標設定の最初の段階では、目標を考えるヒントとして教員から例を提示し、より具体的な目標設定を目指した。目標設定を学級毎に行い、毎週末にアンケート用紙でその週の反省を実施し、その結果を数値で表し達成度合いを確認した。アンケートの内容としては、学級代表委員会で設定された目標について、自分自身の振り返りと学級の振り返りの両者を行った。学級の反省と生徒個人の反省では、大きな差が見られず、学級をより良くするためには生徒一人一人が自分自身の行動を改善していくことが必要であることが確認できた。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 実際にアンケート結果を数値化することで、実態を把握しやすくするとともに、今後の改善策を生徒自身で考えやすくなるようにした。 ② 教員の関わり 目標設定の段階で、最初から全て生徒任せだと抽象的な目標になってしまうことが危惧されたため、教員から例を見せることで具体的な目標設定をねらった。 ③ 実践の過程 今回の実践では、学級で課題を考える時間を設けることが出来ず、教員から目標設定の例示を行った後に、学級代表委員会の生徒が具体的な目標設定を行った。 ④ 活動の振り返りや評価 委員会内で振り返りの時間を設けた。生徒にとっては、やって良かったという印象であった。 ⑤ 実践の準備 目標の例示、目標の教室掲示、各学級でのアンケート【資料Ⅱ. 2. (5)-1】、集計結果の一覧【資料Ⅱ. 2. (5)-2】を準備した。
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) 今回の取組を通しての実感として、「3年生だから出来る」訳ではなく、生徒主体で物事を進めて行くには、1年生からの積み重ねが大切だと感じた。また、クラス全体で問題点や目標について生徒同士の話し合いを行った上で目標設定や改善を進めていきたかったが、時間が確保できなかった。生徒主体とするには時間が必要であることも実感した。 学級代表委員の生徒は、前向きに取り組んでいた。しかし、学級代表委員会の取組にとどまってしまう、各学級で改善策を考える等、学級全体を巻き込んだ取組とすることが出来なかった。 今後の実践では、日々の生徒の活動や委員会での取組、行事の運営や企画を意義や注意点等を踏まえさせながら生徒主体で進めていきたい。

資料Ⅱ. 2. (5)-1 各学級でのアンケート

第3回『みんなで目標達成プロジェクト』

アンケート用紙

() 組 名前 ()

※次の項目について、1週目は①のみ、2週目は②のみ、3週目は③と★を答えてください。

◎しっかり達成できた。○まあまあ達成できた。
△あまりできなかった。×全く意識していなかった
→記号で答えてください。

①第1週目の目標について

○自分自身の達成度は? ()

○クラスの達成度は? ()

②第2週目の目標について

○自分自身の達成度は? ()

○クラスの達成度は? ()

③第3週目の目標について

○自分自身の達成度は? ()

○クラスの達成度は? ()

★クラスの理想像について

○自分自身の達成度は? ()

○クラスの達成度は? ()

→週明けの朝に記入し、学級代表委員へ提出
学級代表が保管し、週明け毎に配布・回収

資料Ⅱ. 2. (5)-2 集計結果の一覧

第1回

1組『落ち着いて行動できるクラス』

27 人	第1週	チャイム 1 分前着席				第2週	授業中私語や勝手な行動無し				第3週	授業中私語、居眠り完全無し			
	◎	○	△	×	◎	○	△	×	◎	○	△	×			
自分	13	12	2	0	10	16	1	0	9	17	1	0			
クラス	14	12	1	0	10	16	1	0	9	18	0				

第2回

1組『身だしなみを整えるクラス』

28	第1週	名札を忘れずつける				第2週	ロッカーを常にきれいにする				第3週	机の中をきれいにする			
	人	◎	○	△	×	◎	○	△	×	◎	○	△	×		
自分		14	14	0	0	16	12	0	0	18	10	0	0		
クラス		14	13	1	0	13	14	1	0	17	10	1	0		

Ⅱ. 2. (6) 生徒会による啓発動画作成

1 実践の場面

生徒会活動(啓発動画作成における実践) 生徒会役員(5名)

2 実践のねらい

生徒自身で作上げたものを評価してもらうことで、生徒の自己肯定感の向上をねらった。

3 実践の内容

生徒会メンバーが中心となり、スマートフォンの使い方に関する啓発動画を「生徒の自己決定」により内容を決め作成し、全校やスマホサミットにて披露した。

作成に当たっては、生徒のアイデアによる動画作成を基本とした。動画によって「何を伝えるのか」、「何が大切か」を生徒に考えさせることから始め、内容や配役も生徒自身で考え、台本を作成した。また、市内のスマホサミットに参加し、作成した動画の放映も行った。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒に「自分たちの手で作り上げている」という経験を得るために、生徒会担当の教員の発案や発信はできる限り少なくし、生徒が主体的に作業を進めた。

② 教員の関わり

教員がアドバイスをしながら上手に生徒の思い、意見を拾い上げることを意識した。

③ 実践の過程

自分たちで決めて進める良さとして、「自分たちで決める→周りに伝える→交流の場を増やす→自己実現」という過程を大切にしながら、生徒会での活動を進めた。

④ 活動の振り返りや評価

スマホサミットの場を利用し、他校生徒からの感想等により評価を得る機会を設けた。

⑤ 実践の準備

学校全体における問題点や改善すべき部分を事前にアンケートにて抽出した。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

コロナ禍においていろんな行事が中止・縮小される中でも、全校(全体)で何かできないか等の思いや考えを積極的に出す姿が見られるようになった。スマホサミットに参加した際にも、他校の生徒に興味をもって自分たちが作成した動画を見てもらう経験は、自己肯定感に繋がっていると思う。今後の実践に向けても、生徒自身から出てくる「学校を良くしたい」という思いから、生徒会における生徒発案の取組ができたらと考えている。



Ⅱ. 3. (1) 生徒が主体となって企画運営した学年行事

1 実践の場面

行事(1年生、例年実施している学年行事の代替行事における実践) 実行委員会(6名)

2 実践のねらい

学校行事(学年行事)を生徒主体で行うことで、生徒の主体性向上をねらった。また、主体性の向上のために、生徒に成功体験を経験させることで学校課題である「自己肯定感の向上」をねらいとした。

3 実践の内容

本来、1年生では学年行事として、集団作りをねらいとして年度当初に宿泊研修を行っているが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となってしまったため、その代替行事として「生徒主体とした学年行事」を実施した。内容としては、レクリエーションが中心であるが、その企画、立案、内容決定、実施、運営まで実行委員の生徒を中心に生徒主導の行事にした。

また、実行委員の生徒のみでなく、企画や実施内容を各学級全体で検討することや、意見を出し合うなど全生徒が行事実施までに企画や決定に関わるような機会を設けた。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒の実行委員会(学級代表委員会メンバー)を立ち上げ、実行委員会の生徒を中心として、生徒自身の意見やアイデアが生かされるような行事づくりを進めた。開催内容の企画、決定やその過程についてまで実行委員の生徒の意見を中心に行った。

② 教員の関わり

生徒の意見が反映されるような実行委員会での話し合いが持てるように、教員から案をおろすのではなく、生徒の意見やアイデアを拾い上げるスタンスをとった。ただし、安全上やコロナ対応上での制限のみ、教員から提案を行った。また、例年にない行事となり生徒にイメージがわからないため、他校の実施例を提示した。

③ 実践の過程

実行委員会の中で、他校で実施された行事を例示することで、行事内容のイメージを掴むことから始めた。その後は、実行委員会で生徒自身が考えて案を作成し、教員(学年団や管理職など)で検討し、再度、実行委員会で案の決定、各学級に案をおろし、意見を募り採択を得る過程をたどった。

④ 活動の振り返りや評価

実行委員会の生徒に対して、教員からの肯定的な評価を意識的に行うことで、この行事だけでなく、今後の活動についても生徒が意欲を持って取り組めるようにした。

⑤ 実践の準備について

実施内容例を示した資料、何を決めなければいけないのかを示した実行委員会の要項の準備

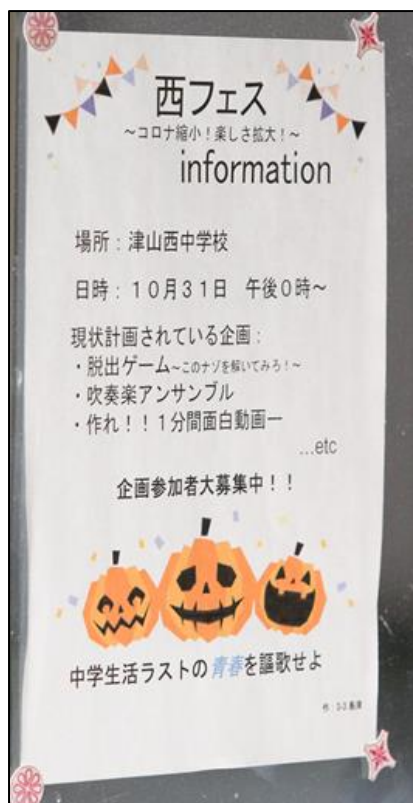
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

学校行事は、生徒も楽しく取り組み、よいものになった。生徒主導の行事はよくある実践ではあるが、そういった実践では生徒のアイデアを教員が肯定的に捉えることが大切である。うまくいかなくてもその過程を認めるなどの、教員のフォローが大切であり、全体の場面(学級や学年全体が集う場面)で実行委員を称えることで生徒の自己肯定感の向上と今後の生徒の意欲へつながると考える。

Ⅱ. 3. (2) 生徒全員が企画・準備・運営に携わる学年行事(学園祭)の実施

1 実践の場面 行事(3年生、修学旅行の代替行事における実践) 実行委員会(12名)
2 実践のねらい 修学旅行の代替行事としての思い出づくりとし、行事を通じた学び(人との協力、自分の手でつくることなどの非認知能力)の充実
3 実践の内容 生徒全員が、実行委員、イベントリーダー、イベントスタッフのいずれかに属し、生徒自身でイベントやブースの企画を考え(何を行うのか、方法や準備物など)、計画、準備、運営を行う形態での学園祭を実施した。生徒全員が、何かしらの企画、運営に携わるようになっているため、全員が主体的に取り組む行事となった。具体的な内容としては、麻雀ブースや手相占い、VR体験ブース、お化け屋敷など可能な限り手作りで実施した。高校や大学の学園祭をモチーフとしており、全体でのダンスや主張大会、カラオケ大会などのイベントも行った。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 生徒全員が、実行委員、イベントリーダー、イベントスタッフのいずれかに属しており、生徒全員が何かしらの企画、運営に携わるようになっている。学園祭当日は、イベントやブース内で運営担当の前半、後半を割り振ることで、学園祭を観覧、参加できるようにもした。 ② 教員の関わり 教員からは、修学旅行の代替行事を行うという方向性のみ伝え、それ以外のことは基本的に生徒に任せるようにした。生徒から出てきたアイデアについて、教員が検討することはあったが、生徒のアイデアを可能な限り実現できるスタンスを大切にした。その他、準備物の手配などはしたが、教員が何かを作るなどといった関りも行っていない。 ③ 実践の過程 第一段階として、実行委員会を立上げ、実行委員会内で、企画のルールづくり、広報(ポスター作成など)、イベントのもち方(工夫など)の担当を割り振り、実行委員会内で決定したことを学年全体に下ろすという過程をたどった。大枠が決まった後は、生徒自身が決めたグループで、それぞれのブースやイベントの企画を計画し、準備、当日の運営を行った。 ④ 活動の振り返りや評価 行事終了後に、生徒自身の個人内での振り返りを行ったり、教員から生徒に向けて「主体的な姿が見られたこと」を全体で評価するなどした。 ⑤ 実践の準備 日頃から、一分間スピーチや共同学習を積み重ねることで、他者との関わり合いや他者を受け入れることを習慣づけた。生徒が活動できる時間の確保など具体的な計画。
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) 今回の実践では、普段見られない生徒に姿(普段は目立たない生徒が目立つなど。また、それを周りも受け入れていた)を見ることができた。生徒の思い出にも残っており、よい行事になったと思う。この行事を通じて、生徒一人一人に責任感が生まれ、主体性の向上につながったと考えている。「今回の行事を実施したから」というより、今までにやってきた小さな積み重ねが発揮できた行事だった。

資料Ⅱ. 3. (2) 学園祭の様子



Ⅱ. 3. (3) 3年生運動会実行委員会による学年種目の企画・運営

1 実践の場面

行事(運動会における学年種目実施の実践) 3年生(142名)、3年生運動会実行委員会(8名)

2 実践のねらい

生徒の集団的主体性の向上をねらった。

3 実践の内容

運動会において、生徒主体で行事を進めることを目的とし、学年種目の詳細を生徒自身が考え、運動会に関する連絡や学年での練習の進行、競技を実施する場面を設けた。

教員から学年種目の実施にあたっての実施条件を提示した上で、実行委員会から学年全体にアンケートを実施、集約、検討し競技の方向性を決めることから始めた。アンケートの回答から実行委員会にて競技内容の方向性(4種目をトラックにてリレー方式で行う競技)を定め、再び競技内容の詳細についてのアンケートを学年全体で実施し、競技内容(ラグビーボール、麻袋、竹馬、バック走)や競技を実施する詳細(順番、距離、ルール、違反基準)を決定した。学年練習の場面で生徒から競技の説明、実演をした後、通し練習をしてみでの改善意見を集約し、実行委員会にて改善案を検討、その内容を学年全体に周知をした。その過程を重ね、予行、本番での実施まで至った。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

競技詳細等の決定までの過程も「生徒の自己決定」で行い、生徒には、アイデアを出す前に、その取組や活動の意義について考えるよう意識付けをした。

② 教員の関わり

教員から、実施条件(怪我しない競技、支援を要する生徒への配慮、競技の時間、競技を実施する場所等)を提示した。

③ 実践の過程

教員側の意思統一(生徒の取組に対しての受容的姿勢)を事前に行うことから始めた。

④ 活動の振り返りや評価

取組が失敗しても、意義が達成されればOKのスタンスを教員が持つておくことが大切である。また、実行委員会内だけでなく、学年全員で考えて本番を迎えることに重きを置いた。

⑤ 実践の準備

アンケート等の提案は生徒自身が行い、その印刷の準備程度であった。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

実行委員の生徒にとっては、自分たちの声が形になることで、自信に繋がったと思われる。実行委員会での経験によって、学級内での掲示物の指示や係分担等の学級運営に主体的、課題解決的な姿勢が見られた。また、自分たちの手で作り上げることを通じて、教員に良い意味の期待(自分たちの意見を聞いてくれる)を持つようになった。

課題としては、実行委員会の生徒のみでなく学年全体のものとなったかという点が挙げられる。今回の取組のような「生徒主体」である「ボトムアップ」を、普段の学校生活へも発展させていきたい。今後の「生徒の自己決定」に関する実践に向けて、「この先生は～」や「この行事は～」等の限定的なものではなく、全体を巻き込めるような取組を行いたい。



Ⅱ. 3. (4) 教員企画による生徒参加型行事

1 実践の場面	行事(生徒参加型行事の実践) 全校生徒(420名)、参加生徒(20名)
2 実践のねらい	コロナの影響により予定されていた行事の多くが中止となった中で、代替行事を設け、生徒が輝ける場面の設定をねらった。
3 実践の内容	1学期と2学期の2回、自由参加型の学校行事を行った。この実践は、教員のOJTグループ活動における1グループの実践である。 第1回(1学期)は、教員が提案した3種目(百マス計算選手権、ボトルフリップ選手権、大声選手権)を実施した。全校生徒を対象に参加を募り、参加種目も選択できるようにした。7月末に第1回の行事を計画、実施し、中庭にて昼休み(約20分)の時間を利用した。希望する生徒はもちろん、参加しない生徒も各教室や廊下、中庭内にて自由に観覧することが出来るようにした。第1回の実施の際は教員が司会進行を行った。 第2回目(2学期)は、実施種目も生徒から募り、実施する2種目(バドミントンラリー、丸太切り)を決定した後、第1回と同様に参加者と参加種目を選択できるようにした。今開催では、行事を盛り上げるねらいで、校内にポスター掲示やCM動画を玄関前のモニターにて上映する等の告知を行い、9月末に第1回開催と同様に昼休みの時間に中庭にて開催した。また、行事の司会進行を有志生徒に任せ、より生徒主体となるような行事とすることが出来た。
4 実践の留意点・工夫点	① 生徒の活動 参加の有無から選択できるようにし、主体的に参加できる行事とすることをねらいとした。また、実施種目を生徒発案とすることで、生徒の特技を生かした参加とすることが出来た。 ② 教員の関わり 何もない状態では生徒にイメージが湧かないため、開催にあたってある程度の形式やフォーマットが必要になる。教員による告知や進行の大まかな台本の準備等、大人の手もある程度は必要である。 ③ 実践の過程 第1回は教員主導で行ったが、その後に第2回を開催する際には、第1回を参考、お手本とすることで、生徒の中の開催に対するイメージを持たせることや、司会進行を生徒に任せることが可能となった。 ④ 活動の振り返りや評価 参加生徒へのインタビューを行い、振り返りをした。また、参加生徒の様子を所属学級で話題にすることで、周囲からの賞賛を得るようにした。 ⑤ 実践の準備 行事開催の告知(ポスターやCM作成)、実施競技等に関する生徒アンケート【資料Ⅱ. 3. (4)】を行った。
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)	生徒の得意分野からの発案により、普段目立たないような生徒が活躍できる場となった。企画開催のあらゆる場面で生徒に託した行事にすることで、生徒にとってはよりよい経験となり、今後の生活に生かせるものになると考える。そういった経験が生徒の自己肯定感に繋がってほしい。また、今後の課題として、行事に参加した生徒に限定された経験となっており、多くの生徒が活躍の場面を経験できる工夫が必要である。

第2回ウエスティカップ 競技アンケート

～挑戦者よ、かかってこい！～

年 組 番 名前

前回の第1回ウエスティカップに出場してくれた生徒のみなさん、また、盛り上げてくれたオーディエンスのみなさんありがとうございました。

現在、10月にもウエスティカップを開催しようと考えているところです。

そこで、みなさんにこれこそはチャンピオンになれる！と自信のあることを募集し、その中から競技を開催しようと考えています。以下の条件を踏まえやってみたい競技、これならチャンピオンになれるという競技を書いて提出してください。また、ウエスティカップの運営をしてみたいという人は、はいに○をしてください。

提出先：1年■■■先生、2年■■■先生、3年■■■先生

★条件★

- ・中庭で行えるもの。
- ・周りに危険が及ばないもの。
- ・道具などを簡単に準備できるもの。
- ・コロナ感染防止に十分配慮したもの。



競技名

ルール

運営をしてみたい？

はい ・ いいえ

Ⅱ. 3. (5) 「生徒の自己決定」による主体的な行事づくり

1 実践の場面 行事(文化祭の代替行事における実践)
2 実践のねらい 学校行事を通じて、生徒の主体性と自己肯定感の向上を目指す
3 実践の内容 新型コロナウイルスの影響により、例年行っていた文化的行事である合唱祭が行えないため、その行事の代替行事として、学級単位でのモザイク壁画の制作を行った。制作にあたって、テーマの設定、モザイク壁画のデザイン作成、制作過程、審査まで生徒の主体的な活動となるような行事とした。行事のテーマ設定から、最後の審査まで生徒のアイデアや考えによる生徒自身の決定により行事をつくり上げることで、生徒の主体性の向上を目指すこととした。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 全校生徒に行事のスローガン(運動会と文化祭で併用)に関するアンケートをとり、生徒会でスローガンを決定することから開始した。そのスローガンをテーマとしたモザイク壁画のデザインを担当委員(生徒)が中心となり各学級で考案し、決定していく。壁画に用いる画用紙の準備やその貼りつけ作業のすべての行程を生徒自身で行い、完成を目指す。その作業の準備や指揮は担当委員の生徒が行う。それぞれの学級で完成したモザイク壁画の審査は全校生徒で相互に行い、各学年での賞、全校での賞について、タブレット端末を用いて生徒全員が投票を行った。 ② 教員の関わり 行事担当教員が行事に関する計画や細案を立て、用具や材料の準備、担当委員の生徒への指示伝達などを行ったが、実働は生徒に任せ、各学級の担任は生徒のフォローに徹し、先導するというより生徒とともに作業を行うスタンスを保った。 ③ 実践の過程 運動会も含め行事においては特に、生徒が主体となるように工夫を凝らしている。行事の序盤はどうしても教員が準備や段取りをしなければならない面がある。しかし、生徒が慣れてきたら生徒に任せられる部分は任せるようにしていく。基盤は教員が作り、実働を生徒に任せることで生徒が達成感を感じられるようにする。 ④ 活動の振り返りや評価 生徒全員が作業や審査の投票に関わることで、自分の責任が必ずあるため、教員は必ず生徒が責任を果たした部分を評価する。結果としての賞の優劣より過程を評価することが主である。 ⑤ 実践の準備 担当委員の生徒が中心となり進めていくため、その担当委員会でしっかりと生徒に自覚を持たせる必要がある。行事の計画や細案、材料や道具などの取りかかりの準備は教員が行う。
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) コロナ禍で、様々な行事が中止、縮小される中で、生徒に達成感、自己肯定感を感じさせることができた行事であった。担当委員の生徒は責任感が芽生え、その他の生徒にとっても自分が行事の一部にしっかりと関わっているという自覚が持てたのではないかと考える。それぞれの学級で、完成に至るまでの過程において、生徒たちの意欲的な姿を見ることができた。

Ⅲ. (1) 生徒のボトムアップによる部活動運営を目指した取組

1 実践の場面

部活動(女子ソフトテニス部における実践) 女子ソフトテニス部(20名)

2 実践のねらい

生徒が自分が何をしなければならないのか自覚する(メタ認知能力の育成)ことをねらった。

3 実践の内容

テニス部において、テニスノート(部活動、テニスに関する内容を自由に記述)を生徒の自由な取組としており、生徒自ら振り返りをし、反省を今後に繋げることをねらいとしている。生徒自らがテニスノートを書く・書かない、書いても顧問に提出する・提出しないは生徒自身の意思により決める。

また、対外試合における目標設定を生徒自身で行い、達成状況や振り返りを生徒主体で行っている。その日に設定した目標をホワイトボードに記入、掲示することで具現化し目標を意識しながら活動に取り組むことをねらいとしている。目標についての振り返りも生徒主体とし、達成できたかどうかは生徒の判断によるものである。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒が提案した練習内容を取り入れる等、教員が生徒からのアイデアや考えを聞く姿勢でいるようにした。

② 教員の関わり

生徒が目標設定をする際に、目標を達成できていないにも関わらず、自分を客観視出来ずに次の目標を設定するような場合、それとなく教員がアドバイスをを行うことで、生徒自身に気づく機会を与える。

③ 実践の過程

目標設定は以前より行っていたが、今回の取組では目標設定を共有・可視化出来るようにすることから始めた。

④ 活動の振り返りや評価に

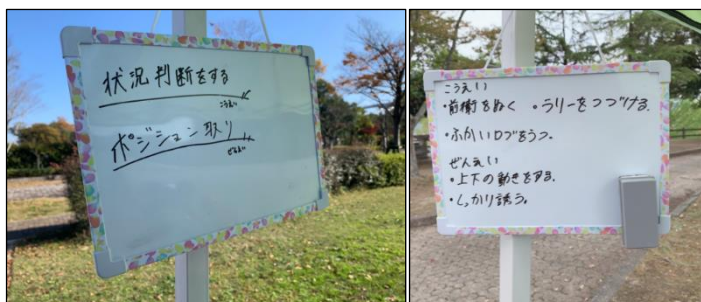
生徒同士で振り返りを行うと同時に、教員からも生徒の活動と、振り返りに対して助言を行うようにした。

⑤ 実践の準備について

目標が記入できるようにホワイトボードを準備した。

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

3年生ともなると、自分たちで判断し、行動できていたが、1年生や2年生の段階では、まだまだ自分たちで適切な判断や行動が出来ていないこともある。自分たちの学年に代替わりすることで、生徒自身に自覚が現れ、新チーム発足当初から段階的に生徒同士でお互いに声を掛け合いながら活動出来るようになってきている。今後は、部長や上級生を中心に、他の生徒たちへの声かけ等の発信力を身に付けさせたい。また、部活動のみに限定した取組とすることなく、普段の学校生活とのバランス(部活動に偏りすぎないように)を生徒が自分で考えられるようにしたい。



Ⅲ. (2) 生徒の主体的活動を基盤とした部活動運営

1 実践の場面 部活動(野球部における実践) 野球部(13名)
2 実践のねらい 生徒が自ら考え、自ら行動し、部活動を通して人間力を向上させる
3 実践の内容 生徒の発想や考えをもとに部活動を運営する。部活動内の組織(キャプテン、副キャプテン、係や役割など)づくり、チームとしての目標、方針、日々の練習や活動、部活における行事などについて、生徒自身で考え、活動していく。生徒がやりたいことを自由にやるということではなく、やりたいこと、やる必要があると考えていることに対して、教員が何のためにやるのか、何が目的なのかを問い続けることによって、活動の意義について考えさせるようにしている。また、日々の活動後や試合後に、一週間の振り返り、次の目標の設定を生徒自身による話し合いで行う。そのために、様々な場面で話し合いの場が設けられるように十分な時間を確保している。
4 実践の留意点・工夫点 ① 生徒の活動 部活動の方針やチームとして目指す目標などを、生徒自身による話し合いで決める。日々の活動についても生徒自身で内容を考え、一週間の活動メニューをチーム内での話し合いで決める。週単位で振り返りを生徒の話し合いで行い、反省点などを補うための次週の活動を考える。また、合宿や行事の企画や行程についても生徒自身で考え、生徒主体で全ての活動をこなすことを目指す。 ② 教員の関わり 生徒の意思や考えを尊重するスタンスで、生徒の発想や考えに任せるようにしている。しかし、すべてを生徒に任せるのではなく、必ず活動の意義や目的を問う。 ③ 実践の過程 まずは生徒に「自分たちで考え、自分たちで活動を進めていく」という自覚を持たせる必要がある。生徒の考えや意思を尊重する以上、教員が前に出ることを意識的に控え、生徒自身に考えさせる時間をしっかりと確保する必要がある、それを継続することが大切である。 ④ 活動の振り返りや評価 毎週末に、生徒自身による振り返りを行うようにしている。その振り返り、評価を踏まえ、今後の活動を行うようにしている。教員からも活動に対しての評価は行うが、その具体的な改善策や次の活動についての提案は、生徒による決定に任せている。 ⑤ 実践の準備 生徒自身に考えさせる、話し合いをさせる時間を確保する。生徒主体で活動を進めるためにも、リーダー性のある生徒の育成が必要である。
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応) 生徒の主体性を考えると、トップダウンの運営よりボトムアップの運営の方がメリットがあり、生徒も達成感や満足感を感じている。生徒の構成が変われば、関係性も変化するため、毎年同じスタンスでボトムアップ式の運営を進めるのではなく、学年の雰囲気や構成する部員によって柔軟に対応を変えていくことも大切である。

IV. (1) 生徒の読書意欲の向上を目指した図書館の活用

1 実践の場面

図書館教育(O J Tグループ活動における実践)

2 実践のねらい

生徒に本に対して興味・関心を持ってもらうとともに、読書意欲の向上をねらう

3 実践の内容

生徒の実態として、本に興味・関心がない生徒が多く見られ、毎朝全校で実施している朝読書の時間に本を読むことに苦痛に感じている生徒が見られることから、本離れが危惧されている。そこで、生徒に図書館に足を運ぶこと、本に興味を持ってもらうことをねらい、教員が本を紹介するブースを設置した。教員が自由にテーマ別のブースを担当し、ブース内でテーマに沿った本を紹介する。その紹介ブースの中から、生徒が一番興味を持ったブースに自由に投票する企画とし、CMやチラシを作成するなどの広報も行った。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

生徒が自由な時間に図書館をおとずれ、教員が設置したブースの中から一番興味を持ったものを自由に選び、投票する。それぞれの教員がジャンルの違う本を紹介しているため、自分が興味ある本を選んだり見たりする。まずは、本に興味・関心がない生徒に少しでも本に興味を持ってもらう。

② 教員の関わり

教員がそれぞれ担当するブースにおいてテーマに沿った本を準備する。生徒に、まずは図書館に来てもらうように、教員で企画のCMをつくり放映したり、チラシの配布など広報活動を行った。

③ 実践の過程

教員グループ(O J Tグループ)の中で、それぞれの教員が担当するブースのテーマ(ジャンル)が重複しないように調整、割り振りをした。担当するブースが決まった後、それぞれのジャンルの本を調達するなどブースの準備を進めた。ブースの準備とともに、広報活動も進行した。

④ 活動の振り返りや評価

この企画を目当てに図書館を訪れる生徒が見られ、日頃よりも図書館に足を運ぶ生徒の数が増えた。生徒自身を直接評価することはないが、本に興味を持ってもらう機会とすることができた。

⑤ 実践の準備

それぞれの教員が担当するブースの本、チラシ、ポスター、CMの作成・放映

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

教員側からすると、この企画の準備や生徒に興味を持ってもらうための工夫(興味を持つような本の選定や広報の工夫)を考えることを楽しみながら進めることができた。教員が本を紹介することを通じて、「〇〇先生はこんな本が好きなんだ」というきっかけを基に本に興味を持ちやすくなったのではないと思う。朝の読書では、生徒に読書をするを強要しがちだが、この企画では、生徒が自由に図書館に向かい、自由に本に触れるため、生徒の自発的な興味や意欲につながったと考える。今まで、朝読などを苦痛に感じていた生徒も少しずつ救えたのではないと思う。



Ⅳ. (2) 生徒の発想力と表現力を向上させる作品募集の実践

1 実践の場面	学年団経営(OJTグループ活動における実践)
2 実践のねらい	生徒が自由に発想を膨らませ、表現する力や意欲を高める
3 実践の内容	学年の共有スペース(廊下)にブースを設け、テレビ番組「IPPONグランプリ」をモチーフとした実践である。定期的に教員によってお題(大喜利的な内容、写真へのコメントを考えるなど)が掲示され、生徒がその回答を自由に考え作品を応募する。人権的な内容は厳禁にしているが、生徒の自由な発想に任せ、細かな制約などは設けていない。一定期間で応募を締め切り、応募のあった作品の中から生徒間で投票を行い、優秀作品を選出する。
4 実践の留意点・工夫点	① 生徒の活動 学年の廊下に設けられたブースに、お題(大喜利的な内容、写真へのコメントを考えるなど)が掲示されており、そのお題に対する回答を生徒が自由に考え、その作品を設置されたボックスに応募する。応募するかどうかは生徒の判断(意志)に任されている。応募期間が一定期間あり、応募された作品の中から、生徒による投票で優秀作品を選出する。 ② 教員の関わり 人権的内容の書き込みがないよう配慮するが、書く内容は基本的に生徒の発想に任せている。教員によってブースの設置がなされ、定期的にお題の掲示と応募作品の回収をしている。また、優秀作品を選出する投票の準備、回収と集計を行い掲示している。 ③ 実践の過程 特に変わった段階もなく、何の予告もなく実践を開始した。実践していく中で生徒の目に触れやすいように掲示を変更するなどの工夫を行った。 ④ 活動の振り返りや評価 ただ応募するだけでなく、作品の投票を生徒に任せて、優秀作品の選出や掲示において生徒が満足感を得やすいようにした。 ⑤ 実践の準備 ブースの設置、お題の準備、作品応募用紙、応募兼投票用のボックス、他教員の承諾
5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)	テレビ番組の真似ごとではあるが、生徒が休み時間に楽しそうに目を向け、お題に対する回答を考えていた。授業などかきこまった中での発想や表現活動では、「勉強」というカテゴリーから脱却できず、生徒にとっては少なからず抵抗感があったが、今回の実践のようなフランクな企画とすることで、今までとは違った形での生徒の発想力や表現力の伸長ができたのではないかと思う。  

IV. (3) 地域行事へ参加する教員チームの、生徒へのチーム名募集

1 実践の場面

全校生徒への教員チームのチーム名募集

2 実践のねらい

生徒のアイデアや選択・決定を活用して、生徒と教員の関係性の向上をねらう

3 実践の内容

教員の有志数名で駅伝チームを編成し、地域の駅伝大会に参加した。教員チームのチーム名を生徒から募集した。生徒は自由にチーム名を考え、いくつかの段階を経て生徒の投票によりチーム名を決定した。決定したチーム名を発案した生徒へ、教員チームから景品を贈呈した。生徒と教員の良好的な関係を構築するための実践とした。

4 実践の留意点・工夫点

① 生徒の活動

教員チームが駅伝大会に参加する旨を伝えられたうえで、生徒が自由に教員チームのチーム名を考え、自由に応募した。応募があったチーム名の中から全校生徒で投票を行い、チーム名を決定した。チーム名や投票は生徒の自由であり、教員からの働きかけが一切ない、生徒による自主的な実践となった。

② 教員の関わり

チーム名の募集などは教員から発信したが、チーム名の発案や投票に関しては、生徒の意思に任せている。また、最終的に決定したチーム名を発案した生徒には、教員チームのサイン入り集合写真を景品として贈呈した。

③ 実践の過程

本実践の前段階として、普段からOJTグループ活動によるフランクな企画や行事が実施されているため、生徒にとっても違和感なく取り組めた。特別な過程は設けていないが、堅苦しいものではなく、遊び心のある取り組みを定期的に行っていくことが今回のような実践で実現している。

④ 活動の振り返りや評価

生徒の自由なアイデアや発想を認めるようにしている。また、ただ募集をかけるのではなく、教員からの景品を贈ることで、生徒にとっても魅力を感じる取り組みとして、意欲を掻き立てるねらいがある。

⑤ 実践の準備

駅伝大会に参加する教員チームの編成、チーム名応募用紙、チーム名投票用紙

5 実践における教員の気づき(生徒の声や反応)

生徒は興味をもって取り組んでいた。固い印象を持たれがちな教員に対して、生徒が親近感をもつ機会とすることができた。生徒が楽しみながら取り組んでいた姿が印象的である。勉強や学校生活とは少々離れた場面でも、生徒に自分で決める場を設定することも生徒の自己肯定感の向上につながるのではないかと考える。

< 駅伝チーム名最終決定投票 !! >

真正なる審判の結果以下の9つが候補に挙がり、我々5人のチーム名に最も相応しいと思われるものをひとつだけ選んでください!!
サイン入り生写真は一枠限りの手に???

最も相応しいと思うチーム名の右にひとつだけ○をつけてください!!	はちゃめチャラ Pins
	TAKUNOMI LOVE♡
	ちゃんと走れ
	ファイト西谷
	でかぶつ5人兄弟
	5G
	ぼっちゃりー☆ミ
	おじの宅急便
	チャーハンス・フタ



指導教員 柳澤 良明

副指導教員 津山 勝義

引用文献：坂本昇一(1991)『生徒指導のあり方』開隆堂出版
文部科学省(2010)『生徒指導提要』

中学校における「生徒の自己決定」実践事例集 第2版

令和4年3月17日 発行

執筆者：岡山県津山市津山西中学校 教諭 福元 亮彦

(令和2年度 香川大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻 学校力開発コース)